明治三十年六月五日發行

女鑑



第百三十六號

東京國光社

女鑑第百三十四號目錄

一の宮御息所



良婦論

臣をして良臣たらしめよ、忠臣たらしむる莫れと云ひけむ。蓋、忠臣は、變に處して初めてあらはるゝものなればなり。當年赤穂の城主にして變なくんば、大石良雄等四十七士は、良臣となりて世を終りて、忠臣とはならざりしならむ。大石等が忠臣の名を殘せしは、淺野家に取りては、此上もなき不幸なり、不祥なり。されば、老子も言はずや、國家昏亂して忠臣ありと。又言はずや、六親和せずして孝慈ありと。あはれ、忠臣とならむよりは、良臣となれ、孝士とならんよりは、良子となれ、貞女とならむよりは、良婦となれ。何をか良婦と云ふ。曰く、親に事へ、夫に事へて、順良にして、能く其の道を守り、子を育て、家を治めて、善良にして、能くその法をつくす。良婦とは此の如きのみ。此のごとくにして、女

子の能事畢れりと云ふべし。

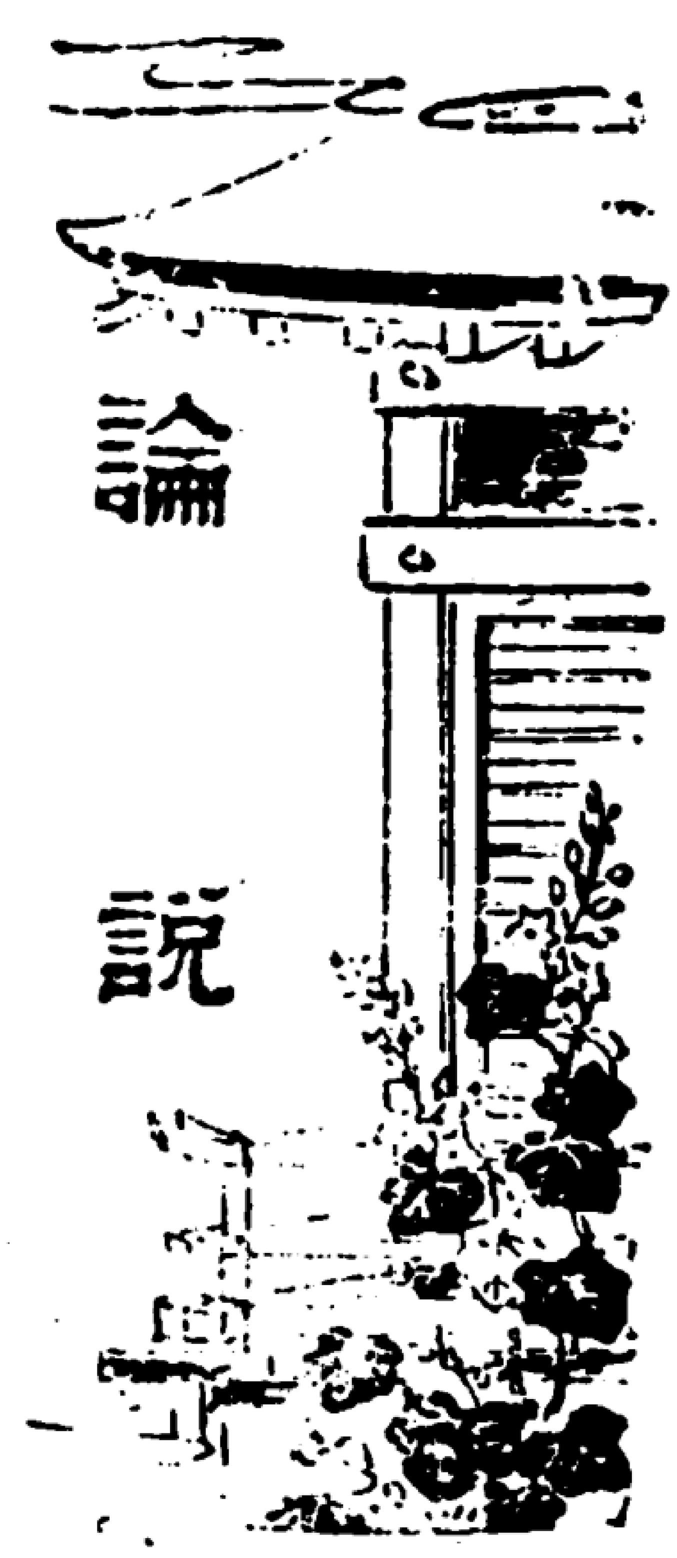
昔、德川氏の初に、了然尼と云ふ女子ありき。世の無常を悟る所ありて、家に獨居す。嫁せむことを勸められて、乃ち曰く、もし子三人を生みたる後、尼となる事を許さば、嫁せむと。かくて、人に嫁す。子三人を生む。是に於て、前約を執りて、家を出で、一寺に至りて尼とならむ事を乞ふ。主僧その年若く顏の美に過ぐるを見て、戒持かたからざるを疑うて、許さず。去て他の寺へ行く、また許さず。乃ち民家に入り、鐵器を熱して、之に面皮を燎きて、醜形となり、再び寺にゆきて請ひしに、こたびは、僧もその志の堅きに感じて、之を許したりと云ふ。これ日本の女子としては、頗る奇異なる所爲にして、佛に迷ふの尤も甚しきものなり。了然は、夫を棄て、子をすて、而して、獨り自ら身をよくせむとす。夫婦の愛情なく、母子の愛情なく、家庭に盡くさずして、徒に佛に盡くさむとす。何等の誤謬ぞや。如何なる事情あるにもせよ。了然の如きは、日本女子の所爲として許すべからざるなり。あはれ、その面皮を燎きて、美貌を醜くしてまでも佛道

に入らむとせし堅牢の志を翻して、夫に盡くし、子に盡くし、家に盡くしたらましかば、その家は如何ばかり榮えたりけむ。佛教の弊一に茲に至れる乎。了然の所爲の如きは、佛教の餘毒の一例に過ぎざれども、佛教は、もと我が國體に適せるものにあらず。その弊害頗る多し。耶蘇もまた然り。日本女子は、まさに我が國體のよろしきに從ひて、日本女子の本分をつくさるべし。妄りに佛教、耶蘇教など、他國の宗教を奉ずべきにあらずかし。

生れて良婦となれば、女子の能事は畢れり。學を修むるも、文を學ぶも、技藝を習ふも、みな良婦たるに資せむが爲のみ。さるに、女子の本分を餘所にして、學問を誇り、文事を衒ひ、奇矯なる行をなして、世の虚名を博せむとするが如きは、敷島の大和の女子の所爲にはあらぬなり。人生、禍福吉凶なきを得ず、貧苦、老苦、死苦、病苦などは、預め之を堪ふるの覺悟あるべし。變あるに臨みて、始めて止むを得ず孝女となり、貞女となり、烈婦となるべきのみ。これ、良婦が變に處するの道なればなり。變に處するの道は、書をよみて覺悟するも可なり、道

を習ひて覺悟するも可なり、古の烈女が變に處せし言行にかんがみて、覺悟するも可なり。今日の女子、病氣變事などあるに臨みて、俄に神を拜し、佛を拜して、その幸福無事を祈るもの、比々皆然り。これ畢竟、平生の修養足らざるに由る。まことや「心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神や守らむ」我が國の敬神の本旨は、皇祖皇宗の遺德を追慕して止まざるの餘に出づ。徒に一身の幸福安全を祈るが如き利己的のものにはあらずかし。

あはれ天下の女子、此の理を曉りて、平生心を正し、道を守り、樂に在て苦を忘れず、貴に在りて賤しきを忘れず、變に處するの覺悟ありて、吉凶禍福つゆ驚かず、悠々として運に安んじ、天を樂むの心掛なかるべからず。奇を求めず、譽を願はず、良婦となりて、親に盡くし、夫に盡くし、子に盡くし、家庭をして和氣常に靄々たらしめよ。これ國家の繁榮隆盛をいたす基なればなり。



女子敎育に就きて

齋木文夫

女子に敎育の必要なるは、男子に敎育の須要なるが如し。未だ女子敎育の無用を唱道する者あるを聞かず。故に、單に女子敎育の須要を喋々するは「六日の菖蒲十日の菊」たるを免れず。されど、近來、一派の論者が、我が國の女子をして、英國風たらしめ、米國風たらしめ、將、又、耶蘇の信徒たらしめん爲に、遊説し、勸誘し、事新しく女子敎育を主張し、兼て、女子大學を設立せんとするなれ。其の勇氣と大膽とは、稱揚するに足るも、鬱勃たる野心の發動する所　皇國の大道を忘却し、皇國の風俗習慣に違背し、己を欺き人を迷はすに至れるは、惜みても尙は餘りあり。

敎育に宗敎臭味を混入すべからざるは定論たり。然るに、論者は、汎濫たる社會の逆流に立ち、女子敎育なる著書に於て、敎育には宗敎思想の養成欠くべからずと絶叫せり。論者知るや否哉、佛敎は寂滅爲樂を彼岸とし、耶蘇敎は君臣父子の差別なきこと

を。

フユステル、ド、クーランジは、法制史の大家なり。其の古歐家制を解説するに、序して曰へり「人が其の父、若は祖先を崇敬すると云ふことは、吾人の信じ難き所なり。然れども、是れ事實なりき」と。此一言以て耶蘇敎國人に孝道の説明し難きを知るに足らん。然るを、論者の要求する宗敎思想は、死せざれど止まざる佛敎なるか、或は無君無父の耶蘇敎なるか。

我が國の古代に宗敎なし。又道德に宗敎の力を借りしことなし。中古以來、文學は僧侶の手にありしことなきにあらざるも、尙、佛は夷狄の一法のみ。後漢の時より、流れて中國に入ると云へる文章は、本邦人の愛讀せしことたるや疑なく。佛者も、亦、師匠として四書五經を傳授し、異端を攻むるは害のみと云へるを憚らざりしを見れど、宗敎と道德との區別判然たりしや明かなり。今世に至るに及びても、學校敎育に宗敎の力を借りしことなきのみならず、敎育勅語と、耶蘇敎との趣旨は、全然相容るゝこと能はざる者なれど、吾人は、敎育に宗敎の臭味を帶むしむることは、夢想だもせしことあらず。

然るに、女子大學設立論者は「學校内に於て、奉敎の自由を實在せしむるのみならず、

吾人の所謂宗教教育の實施せられんことを欲する者なり」と、斷言するに至りては教育勅語は之を如何せんとするか。

尙、又「女學校の宗教教育上より生ずる家庭に於ける衝突の恐るべきを論ずる者ありと雖も、吾人の所謂宗教教育を正當に實施せんか、此等の弊害は跡を絕つに至るべし。若、何等弊害ありとするも、ろは、唯、智識教育が、家庭に一種の衝突を生ずると仝一にして、また恐るゝに足らざるべし」と論ずるに至りては、其隱謀に驚かざるを得ず。論者は、傳導師たるを避け、特定の宗教を注入せずと辯護しながら、眞意は一種の傳導者たる者なり。然らずや、家庭の衝突を豫言するを得ざるべし。

論者は、此の思想を以て女子大學を設立せんとする者なれば、其の趣意書の冒頭にも云ふべき所に「帝國が世界の舞臺に立ちて、天の使命を演ずる開幕たるに過ぎざるのみ」と揚言せり。實に大坂の梅花女學校、新潟の高等女學校に於て、耶蘇教の普及に汲々たる平素の熱心は、脆くも暴露して餘蘊なし。

天の使命とは何物なるか。帝國が天の使命を演ずるとは如何なる趣旨なるか。論者の平生に察し、演說に考ふるときは、論者の指示せる天は、儒者の所謂天にあらず、又、吾人の唱道する天訓宏謨の天にあらずして、宗教家中特種の性質ある、耶蘇信徒のみ

了悟する天帝なり。

我が國に於ては、君一系、臣万世、曾て禪讓放伐の歴史を有せず、皇室は吾人の宗家にして、皇室以前國家なし。故に天皇と國家とは、同一体たり。然るを、帝國が天帝の使命を演すとは、必竟、天皇が天帝の命令を傳達する使者たりと云ふに外ならず。之を無禮と謂はずして何ぞや。無君無父の特色は爰に於て明白なり。

論者が、我が國體を知らざるは、我が神聖なる神代史あるを辨へざるに基因せることは、帝國教育會に於て「我が大和民族が、呱々の聲を敷島の大和島根に揚げましてから、爾來二千五百有餘年の長い歳月を過ぎ去つて居ります」と、云へるに徴しても明かなり。若も、神武天皇の即位以前を認めずとならむ、神武天皇の東征も認めざるべく、又、當時の國民をも認めざることとなるべし、痴呆も爰に至りて極まれり。歴史を知らずして人の子を教育せんとするは、深山幽谷の古松を移して、磯慣松たらしめんとするが如し。人の子を害はずんば止まず。眞正の教育は決して望むべからず。

吾人は、常に、我か神聖なる歴史を尊敬せり。故に、女子の教育も我か國体に適合せしめ、忠良なる女子、即賢妻良母たらしめんことに拮据盡瘁せり。然るに、論者は、之を以て足らずとするのみか、女子の高等普通教育に於て、外國語の必要を主張し、

外國語中英語を學ぶべしと斷言せり。米國に心酔せる眼光を以ては、無理ならぬ次第なれども、或は、爲にする所あるにはあらざるか。

國として國語あらざるはなく、日常の交際、智識の授受、不便を感じ、不足を覺ゆることなし。雄偉濶大なる豐公は、三百年以前に在りて、支那語をも避けしめんと務めたりき。帝國大學、亦外邦語廢止の運に向はんとするに、女子敎育、殊に普通敎育にも、外國語の必要を說ける心の底、淺ましとや言はむ、情なしとや言はむ。

宗敎國たる英米の讀本を使用せむ、唯一の天帝を說明し、宗敎思想を養成するには、掘强の方便なり。然れども、我か國は、道德に、宗敎の力を借ることあらず。皇祖皇宗の遺訓は、炳焉、既往將來を照曜して、毫も他國の敎義を移植するを要せず。然るに、歷史を知らざる論者は、偶然にも「本邦現時の女子の体力、及腦力に適合する課程を編み、順次漸進する策を取り、妄進の弊をさけ」と說きて、一點の良心は、倘泯滅せざる者あるを表明せり。されども、傳導の野心は蔽はんとして能はず。突飛主義枝條を蔓延して「戰捷を敎へたる者は、敗北である」「何れ手を出したならむ、失敗することもございませう、又、弊害の生ずることもありませう」「先づ方針を確と定めて行つて見る、試驗して見る、經驗して見る、即實驗に訴て行つて見ることも、一つは

しなければならぬ」と放論するに至りては、其の大膽に驚かざるを得す。若し、此主義にして天下の容るゝ所となるが如きことあらば、女子の教育は、試驗的となり、玩弄的となりて終らんのみ。女子教育を尊重するの實、何くにかある。女子は一種の器械たらんのみ。國民の半數を占むる女子を、器械として使用し、之に依りて傳道の目的を達し、皇國をして無君無父の耶蘇教國たらしめんとするに至りては、國家の前程、爭でか憂慮せざるべき。されば、吾人は、進みて、女子大學設立の教育方針を論評し、彼が果して世界主義たらざるや否やを明かにせんと欲するなり　（以下次號）

女子教育一斑（四十二）

三輪田眞佐子

第四　配合の意匠につきて　同じ材料の事物にても、その位地の配合如何によりて、あるは閑雅に見え、將た殺風景におもはるゝもあれは、奥ゆかしく感せらるゝもあるなど、その趣味に、種々の差別を生ずるものぞかし。されば、女子の美育に於て、配合の意匠を開發することそ必要なれや。

蓋し、意匠は、潜みて、いまだ人目に見えざる、天然の美を表すべき工夫に過ぎず、故に、いかばかり卓越する意匠ならんも、絶えて天然になき美を、人爲を以て創造する

は難し。然るに、意匠なるものは、全く人の想像に止まるものとの説を懐くものは、人爲の配合にのみ心を用ゐて、卑俗なる工夫を企つるとかや。おのれは、總て意匠は、天然を祖述すべきものと信ぜり。

そも〳〵、天然には、一致、若くは齊一とも言ふべき法則あるめり。由りて、美育につき、配合の意匠を養はんとならば、この法則に從はでやはあるべき。たとへば、山はいよゝ高きを尊び、淵はいよ〳〵深きを尊ふが如く、決して人爲を以て顚倒すべからざる理勢あるなり。すなはち、天地間の事物は、一切相當したるものを以て、配合の宜しきを得たるものと言ふべし。されば、この相當を認識する力を養ふことな忘れそ。

先つ位置の配合につき　美の智識を得る方法は、活花を學ぶべし。凡そ活花は、天地人の三才に擬するものにして、あるは枝を矯むるもあり、曲くるもあり、あるは剪むなど、一瞥天然を害ふ如くおもふものあらんかなれど、概ね草木は、風雨寒暑のため、天然の美を妨げらるゝことを免れざるをもて、更に天然を祖述するところの意匠を加ふるにあらざれば、美趣を現すこと能はざるべし。

その他の學藝も、各幾分か、配合の意匠を養ふよすがとならざるものはあらじ。就中、幾何學などは、曲線直線の性質及ひ相互の關係を知りて、齊一の智識を得ること頗る

多し、亦、刺繍、あるは書學の効もこれに劣らざるべし。
源氏物語の末摘花の卷に、むかし物語にも、人の御そうぞくをこそはまづいひたゞめれ、ゆるしいろのわりなう、うはじらみたるひとかさね、などりなうくろきうちきかさねて、うはぎには、ふるきのかわぎぬ、いときよらにかうむしきをきたまへり、こだいのゆゑつきたる御そうぞくなれど、なほわりやかなる女の、御よろひには、にげなう、れぞろ／＼しきこと、いともてはやされたり」云々、と、あり。これを見るにつけても、女子たるもの、配合より起る美の關係を知らざるときは、高雅の裝をなすこと能はざるべし。思ふに、なべて女子の、もとも心を用ゐるは、身躰の裝飾ならんを、若、配合の意匠なくして、人の笑を遁れんとするは、さながら、濕をにくみて低に居るが如し。

既に配合の意匠に長けんものは、家具の陳列悉く宜しきにかなひ、期せずして一家の風格を美ならしむべし。たとへば、賓客に火鉢を進むるに、そが疊の目と平行せざらんときは、おのづから齊のはざる心地こそすれ、亦、孔夫子の、きりめ正しからざれば食はず。と、のたまひしは、道徳、及び衛生上の理由もあらんかなれど、美にも關係わりど言ふも可ならんか。わきて、料理のごときは、味の配合は更なり、器具の配合

如何によりて、美味を感ぜしむるに足らん。そは、各自の實驗に徵すべし。

淸少納言は、能文をもて譽高き女子なるが、固より簡潔奇拔の筆力によらんも、その人をして、げにと感ぜしむるふしは、材料の配合宜しきにあるめり。たとへば、そのものせし枕草子を見るに、開卷先づ、春はあけぼの、夏はよる、秋は夕ぐれ、冬は雪など、各相當なるものを撰びて四季をうつし、「且、烏のねどころへゆくとて三つよつ二つなど飛びゆくさへあはれなり」と、字句の配合最早妙を得て、實景を聯想せしむるに足るなり。まことや、かゝる文章は、主として美をうつすべけれど、さあるべきにこそ。

かく配合の意匠は、應用廣きものなれど、女子つとめてその美境に達せんか、これを百般の人事に施し、餘情掬すべき生活をなすも難からざるべし。

月はなを大和島根にゆつりおきて
ゆきに都の名をさためけむ　（恒　辨）



史談

一の宮御息所

鹽井ふく子

一の宮と聞えまつるは、後醍醐天皇の一の御子にて、そが御息所に亘らせ給ふは、今出川右大臣公顯卿の御姫にれはせり。さて、一の宮此の御方を北の御方となさせ給ひし御心づくしは、世にたぐひなき御事と覺えまつる。一の宮初ひ冠り召させ給ひて、新宮の内に成長せさせ給ひし後、御才學も、御容貌もいみじう世にすぐれてましませしかば、必ず春宮にならせ給はんと、世の人、ときめきわへりしに、關東の專横、遂にこの君を立たせまつる事なく、後二條院の第一の御子を春宮に立たせまつりしかば、この宮にまゐり仕ふべき人も、みな望を失ひ、宮も世の中わぢきなくればしなされて、あけくれ、たゞ詩歌に御心を慰めたまへり。

わるとき、關白左大將の出されける繪に、源氏の優婆塞の宮の御娘、眞木柱のかげに居がくれて、撥を上げ、さしのぼりたる月の方をのぞきたる顏つきのいみじうらうた

く、匂ひやかにかきたりしに、宮、ふと、此の繪を御らんぜしより、ろのらうたげなるさまの、いみしう身にしみさせ給ひて、まきかへしまきかへし御らんぜらるゝまゝに、いよ〳〵思ひしみさせ給ひて、ねたねさせ給はず、思召しわづらはせ給へど、せめて御心をやる方もやとて、御車にめされ、御手洗川の川水を御手に結びれ、何となうさすらひ給ひ、むかし業平中將の戀せじと御祓せし事ども思ばし出でられて、

いのるとも神やはうけんかげをのみみたらし川のきよき思ひを

と詠せさせ給ふ時しもあれ、一村雨のすぎ行くほど、木の下つゆに、御袖もしをたれさせ給へるに、日もくれぬと申して、御車をとゞろかし、一條を西へ過ぐさせ給ふに、誰が住む宿とは知らず、垣根あれ、瓦にこけむしけるふるびたる宿に、撥音の氣高う青海波をぞしらべたるあやしう耳とまり給へど、御車をとゞめさせ、遙に見そなはし給ふとも知らず、内には、折りふし夕月のしぐれにぬれて、ほのあらはれたるに、簾を高く卷き上げて、年のほど二八ぞかりなる少女の秋の別れを慕ふ曲をうたふ御聲も、琵琶の手も、いとめでたうらうたけれど、宮は御目もあやにつく〴〵と御らんじ、二心をつくし給ひし御繪よりもまさりて、いとゞ胸の思を添へさせたまへり。忍ぶれど、色に出でさせ給ふを、常に御會に參りける二條中將爲冬、それと推して、

かの女房の御事をくはしく尋ねけるに、公顯の御女にて、德大寺左大將に申名づけながら、皇太后宮の御匣殿にてれはすよしを聞き知れり。皇子にはせまつらんと、さまぐ〵に心をくだきぬれば、御匣殿はもと申名けある身なれば、つれなくのみうち過して、宮の御消息は聞きもせざりしに、德大寺殿、此の事を聞きて、あなかしこ、さばかり宮の御心にかけ給ふを、たとへ約は結びたりとも、如何で臣が方にとるべきとて、宮にゆづり奉りけるに、宮今は憚りなく、御文をものして、

知らせばや鹽やく浦のけぶりだに思はぬ風になびくならひを

とありけるに、御匣殿も今はあまりにもつれなからず

たてぬべきうき名をかねて思はずば風に煙のなびかざらめや

と、たゞ御歌ばかりをかへしけるに、宮はいたくよろこび給ひて、やがて、此の君をば御息所にたゝせ給ひぬ。

かくて、偕老の御契り深くましましける事、まだ一年にも足らぬほどに、世はいたく亂れて、主上は隱岐にうつされ給ひ。此の一の宮もまた土佐の畑と云ふ處へ流され給ひぬ。御息所はひとり都に留まらせ給ひて、あけくれ御淚にながめさせ給へど、いつしか參るりつかふまつりける青侍、官女の影も消え、流石高かりし玉の宮居もあれは

てゝ、蜘蛛のふるまひあさましく、庭もまがきもたゞ露の色のみ深かりけり。宮にもれなじれん思ひに、月日も知らずあてがれさせ給ひ、浦の鹽やく煙、はるゝまもなき御歎きにしづませ給ひければ、御警固に候ひける有井の庄司、御いたはしく覺え奉りて、御息所を忍び迎へ奉り、せめてもの御心をなぐさめ奉らんものをとて、御衣一つを仕立て、道の程の用意こま〴〵とゝのへ、宮に啓し奉れば、限りなくよろこばせ給ひて、只一人召し仕られける右衞門府生、秦の武文と申す隨身を、御迎に京へ上せらる。武文御文を給りて、急ぎ京都へ上り、一條堀川の御所へ參りて、使のよし申しければ、さらでも戀しき折りから、心もとびたちて、武文に道しるべさせて、女房二人三人を從へて、輿にのりて、いでたち、尼が崎に至りつきて、しばし、渡海の順風をぞ待たせける。

こゝに、筑紫に、梅浦五郎と云ひける田舍武士、同じく此の浦に風をまち居りけるが、御息所の御形の世になくうるはしきを見て、惡心を起し、一夜深更ひそかに松浦が郎等三十余人、物の具ひし〳〵と固めて、御息所の館に亂入しぬ。武藝すぐれたるものなれば、力をつくして拒ぎけれども、衆寡敵せず、敵の放ちたる火勢つよく、その煙の浦風に吹きはれたるにむせひ入りて、防ぐべき樣もなかりければ、まつ御息所

を負ひ奉りて、一條の血路を開き、沖なる船を招きけるに、一船はやく渚にさしよせけるに、武文大によろこび、屋形の内へ入れ奉り、件の女房達をも舟にのせんものとて、走り歸りたるに、宿は早や火となりて、人も物も見えぬに、是非なくまた汀に歸れど、御息所をのせたる船は、早や帆をかけて走り行くに、その船かへし玉へと喚はりけれども、耳にも入れず、いよ／＼走り行きぬ。憐れむべし、前門虎をふせぎて、後門狼を入る。この船はこれ梅浦が迎にとて參りける船にして、思ひかけず上臈を乘せたるをよろこび、郎黨眷屬百余人、とるものもとりあへず皆船にのりて、かくは走れるなり。武文は岸なる海士の小船にとびのりて、自ら櫓をおしつゝ、追ひかくれども、遂に及ぶ事能はざれば、今は是迄なりと、腹十文字にかき切りて、蒼海の底にぞ沈みける。

御息所は、虎狼の群に捕へられたる小羊の如く、進退きはまりて、ひた泣きに泣き入りてのみおはしけるに、其日のくれ方、阿波の鳴戸を過ぎけるに、俄に風あらく、浪たちて、船は幾んど覆らんとす。かくて、三日三夜に及ひて、船はなほ一つ所をたゞよひけれど、船中今は生ける色なく、これ龍神の御咎にやと恐れけるに、一人の梶取、船底より這ひ出で云ひけるは、龍神此の上臈を思ひかけ玉ふによりて、かくは海ある

ゝなり。早くその上臈を海に入れて、龍神をやわらげられよとすゝめければ、情知らぬ醜の武夫ども、げにもと同じて、無慚にも御息所を抱きて、今やなげ入れんとし奉るに、一人の僧の同じく船に乘りたるが、理をつくして、諫めければ、流石に松浦も道理と思ひかへして、御息所をまた苫屋の内へあらゝかに投げ入れたれども、海中にいろ〳〵のあやしきものども浮ひ出で、中にも武文はこをとりて其船かへせ、留まれと招ぐ如き影の見えけるに、梶取等之を見て、さては武文が怨靈のなすわざなり。早く此の上臈を外へやり玉へと云ふに、松浦小船一艘を下して、御息所をのせ、一人の水士をそへて海中にれし流しまゐらせぬ。この小舟、八重の潮路をたゞよひて、幸に淡路の武島と云ふ處へつきければ、水士かひ〳〵しく御息所を海士のとまやに入れまつりけれども、いたましや、御息所は四五日の波風に御心はもまれ、御膽も消え入りて、息もはやたえはて玉ひけるに、心なき海士の子まで、泣きかなしみ、さま〳〵に介胞しければ、やうやくにして、御息出でさせ玉へり。

賤の海士のなさけに、雨露をしのがせたまひ、この上のなさけには、せめて土佐の畑に送り得させよとのたまへど、海士力及ぼずして、徒らに孤島の中に、うき月日を送らせたまひぬ。されど、浮雲いかでか永く月日を蔽ふべき。諸國に勤王の士起りて、六

波羅、鎌倉、九國、北國の賊ども一時に亡び、主上は隱岐より還幸ましまし、宮も土佐より都へ歸らせ給ひぬ。太液の芙蓉、未央の柳と云ひけん、もとの都のさまを見るにつけても、いと御息所の事のみなげかせ給ひけるに、淡路の武島にまだとゞまりてれはするよしを聞こしめして、大によろこび給ひ、直ちに御使を下して、都へむかへたまひけるは、かの王質が仙より出て七世の孫に會ひたる思も啻ならず、互に御袖をしぼりて、たゞ涙にくれ給ひけるも、げに道理なり。

再會の歡樂未だつきずして、世はまた亂れぬ。此の宮、都を落ちて、越後の守新田義顯と共に、越前金ケ崎にたてこもり給ふ事三四月に及びけるが、遂に糧つき、刀折れて、あへなくも、義顯と共に御自害めされて、御首、京都に上はり、禪林寺の長者、夢窓國師、喪禮とり行ふなど聞ゑしがど、御息所の御かなしみはたゞへんものなく、前後もわかず、なげき沈ませられ、あけくれ無き人を戀ひ給ふ御涙は、日かずをふるまゝに、いよ〳〵深く、遂に中陰の日かずも終へ給はぬほどに、御あとをしたはれて、はかなく消ゑさせ給ひけり。げに、果敢なかりける御生涯、古を知るもの、誰かはそゞろに涙にくれざるものあらむ。

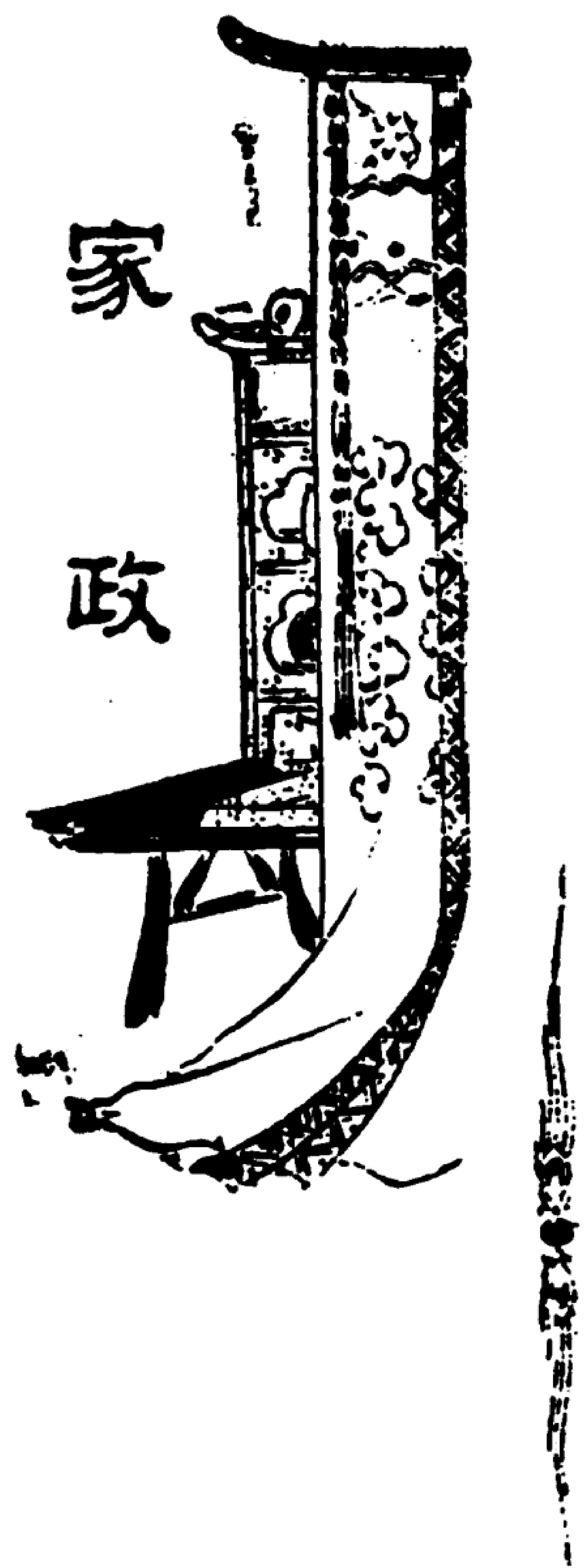
ふき女が事

薫風仙史

ふき女といへるは、肥前の天草島の人なり。いとをさなかりしときに、長崎にゆきて人の婢となれり。さて數多の年をへて後、そこの磨屋町にすめる香屋なにがしに嫁けり。さるをこの香屋某身持放蕩にして、こゝかしこあそびありきて、はては家出して行へも知れずなりぬ。父母ともに年いたく老にたれど、ふき心を碎きていたくなげきていへるは、妾今もしこゝを出てゝいなど、誰かこの老の親を養ふべきとて、ひとりふみとゞまりてねもごろに養へり。この家もと樒皮を剝ぎとりて香をつくりてひさぐをもて過ぎはひとす。されどふきは晝はひねもすに樒皮をかひありき、夜は夜ふくるまで、こを舂きて粉末とし、舅は出でゝこをひさぐをもて常とせり。又家に田あれども、舅姑ともに年老いにたれどふきひとりくさぎりたがへし、稻に肥をあたへ、麥を刈るなど手ひとつにつとめはげむ。ふきがうみの親このさまを見て、里よりしば〳〵人をやりて、いはしめていへらく、汝家には夫なし、女の手一つに艱難して家ををさめんよりは、我がもとにかへりこねよ、またよき緣もあるべきにといへど、ふきは、妾居ざらんには、誰か舅姑を養はんとて遂にきかざりき。長崎の府尹大岡某この孝節にめでゝ、米十苞、白銀十枚を賜ひてほめたりきといふ。こは中御門天皇の御代正德の四

年のことにて、今よりは百八十餘年前のことなり。

家政



三井家婚禮式

通ひにたちたりし一人

神供と膳部と禮飾掛

四月すゑの九日、かうぢ町一番町なる三井得右衛門氏の、松平なにがしの女をよめとられたりけり。順序を追たる婚姻の禮飾のくはしき事は、既に先々の女鑑に掲げられたれど、はぶきてこゝには、神の供物と、當日の三献の膳部と、服紗料理の献立とをしるせり。

神床供物

置鳥　白木三方

紅白紙立　銚蝶花形　口花糸ニテ

瓶子　白木三方

長柄銚子　白飾　雄蝶糸口花

白木三方紅白紙立　若松、竹、梅ノ心ヲ立テ

餅蓬萊

檜　八足机　（下段）

三ツ土器　白木三方

鏡餅一重昆布包　大伊勢海老ヲ上ニ置ク

置鯉　白木三方

瓶子　同紙立雌蝶花形　口花糸ニテ　白木三方

加へ提子　白飾雌蝶糸口花

長熨斗鮑　紅白水引梅結付　米　結熨斗鮑　山椒　結昆布　白木三方　（敷紙）

（雑煮三献）（盛たる図さわはせ見るべし）

（初　献）

昆布　小角平甲立　尺長白箸

熨斗鮑　上同

（二　献）

勝栗　上同　耳土器

五種盛　亀甲角蝶甲立　尺長白箸

雑煮　同土器下輪　大根　里芋　青菜　のし　こぶ　花かつを

田作盛　右同　耳土器

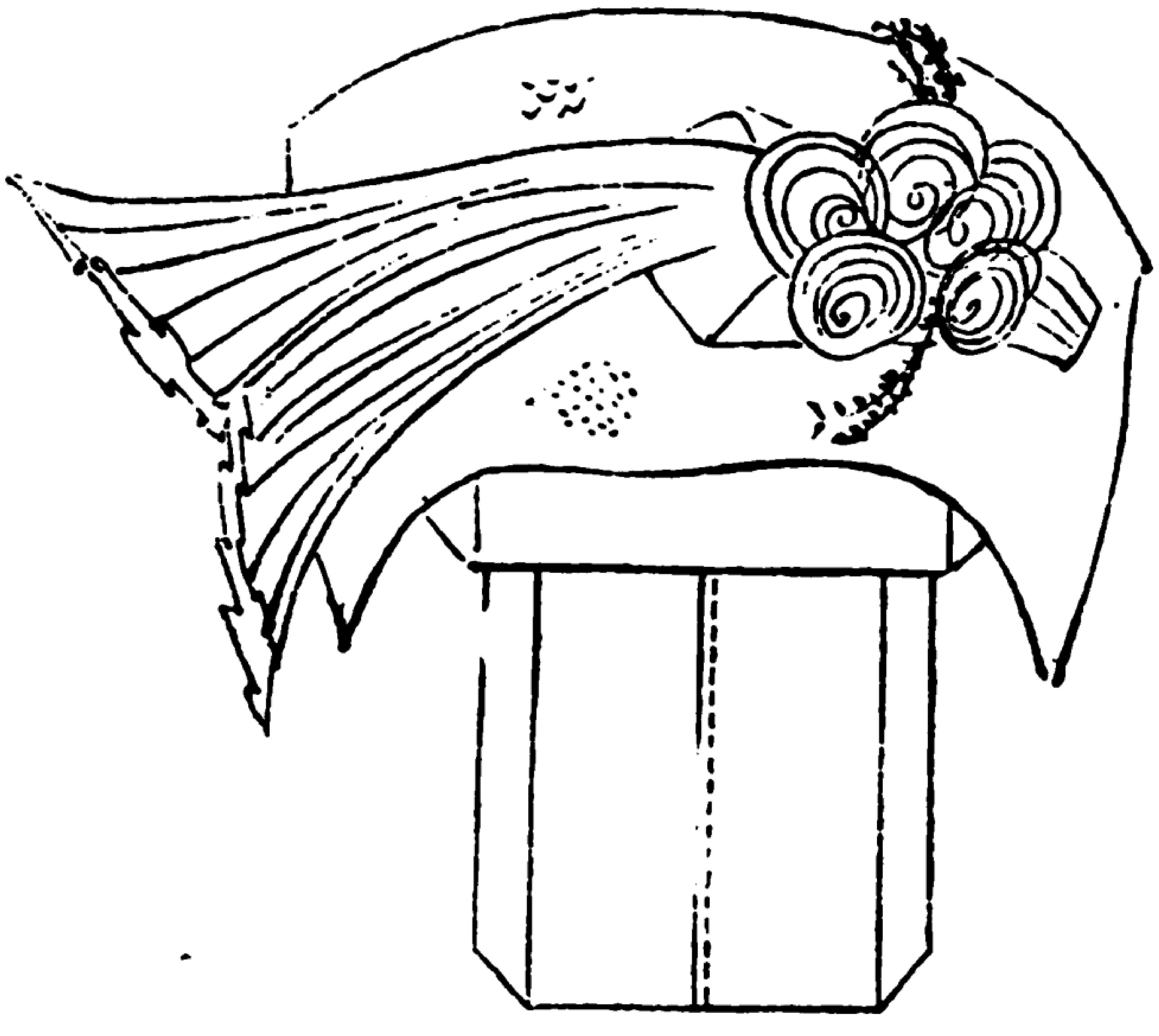
（三　献）

船盛　小角蝶甲立　尺長白箸

吸物　たひひき

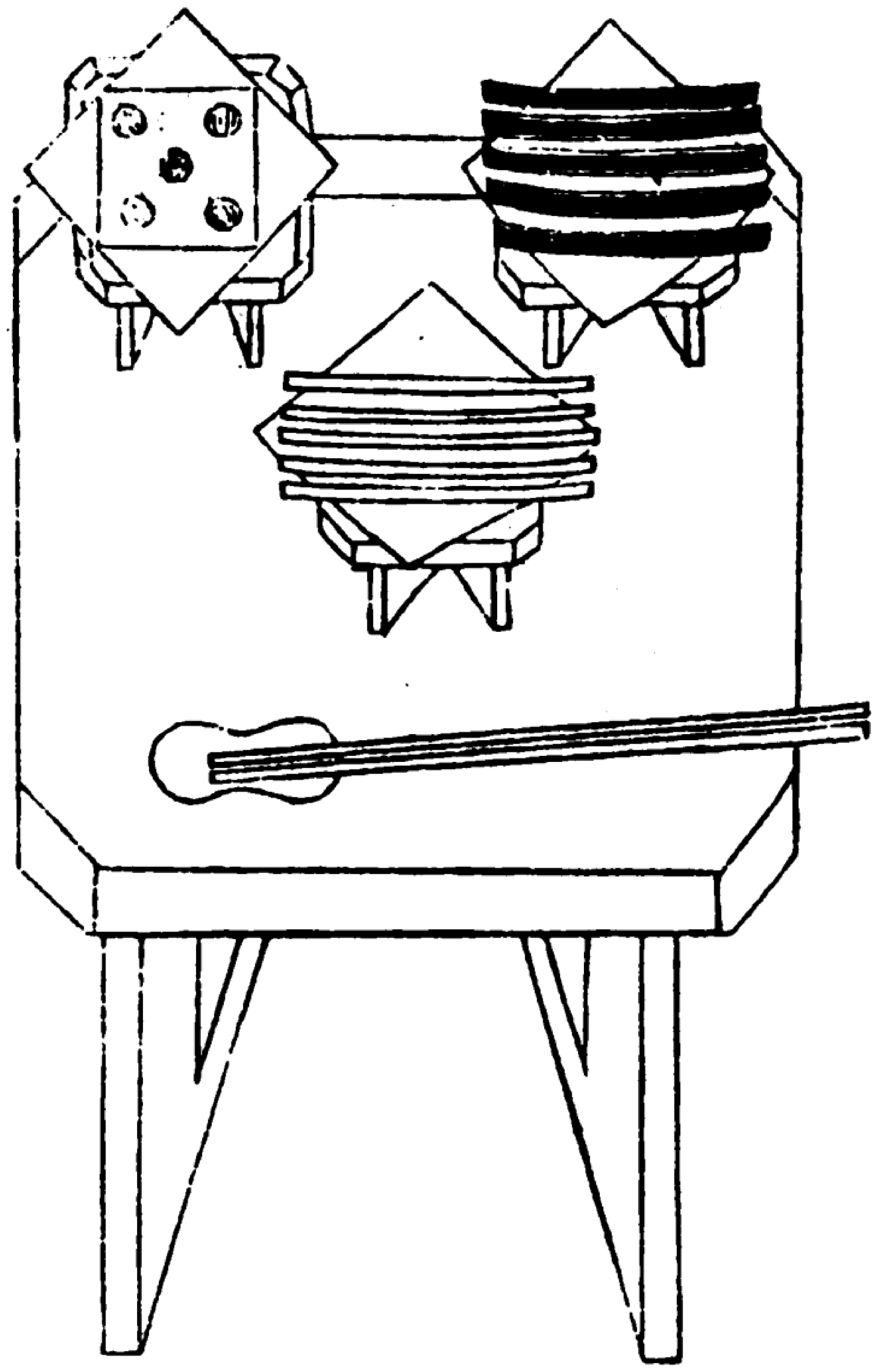
羽盛　小角蝶甲立足亀足　耳土器

長熨斗鮑



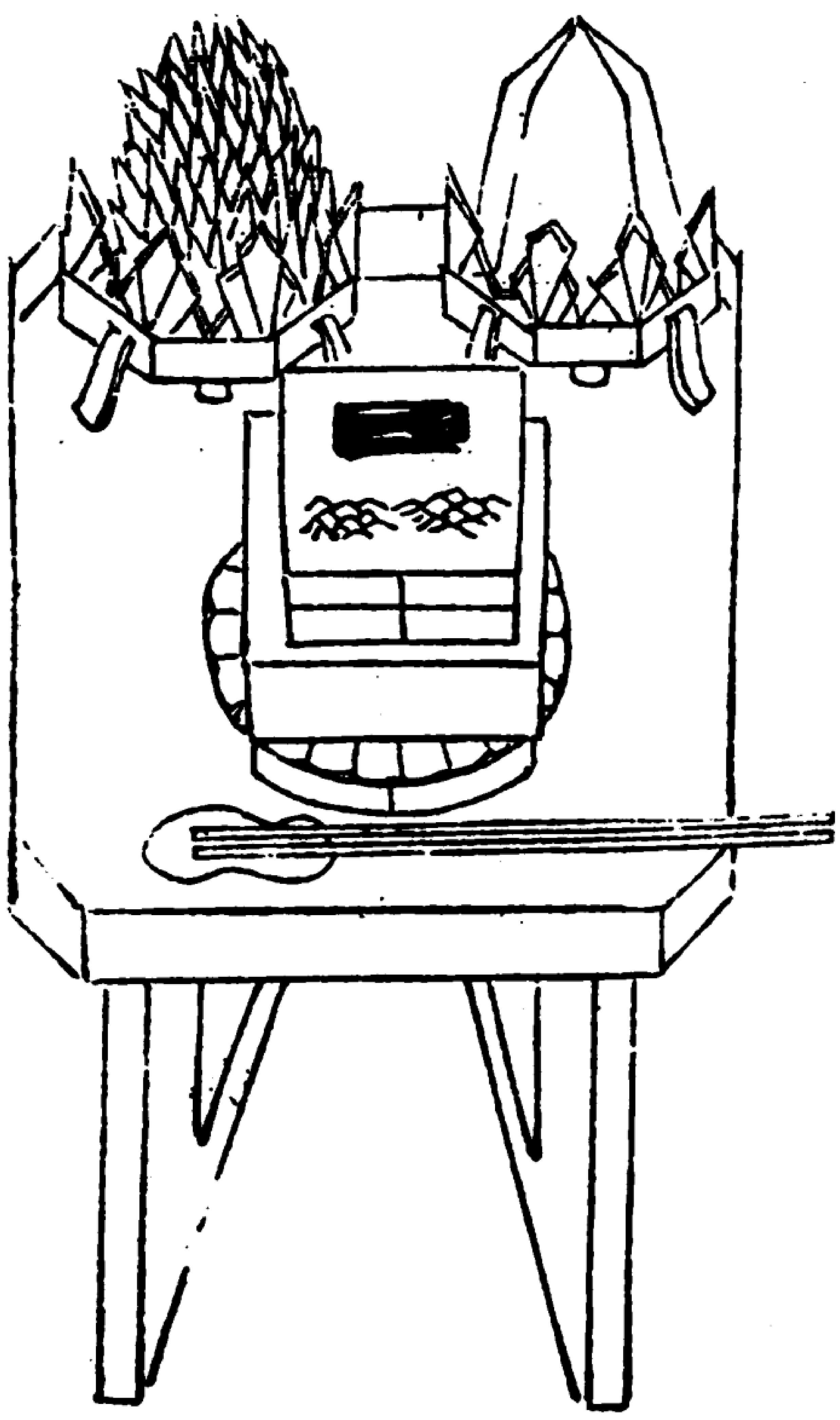
初献

熨斗鮑　昆布　勝栗



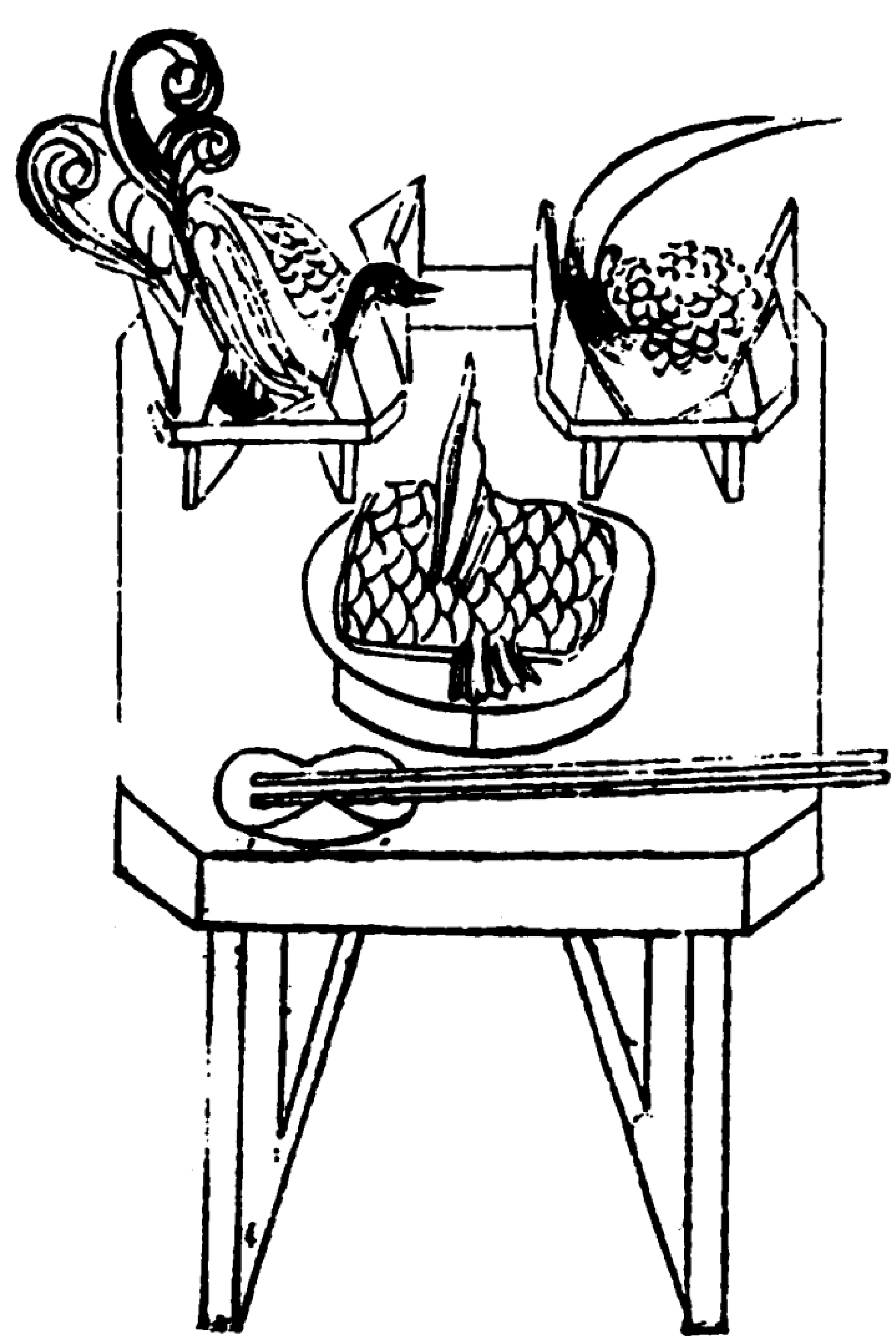
二献

五種盛　雑煮　田作盛



三献

船盛　鯖　羽盛



服紗料理献立（上向）

御本膳

御汁　越後味噌
花麩　順才

御生盛（古今利角皿・南京染付猪口）
白髪大根
千種鱠子
花赤貝
岩茸
若芽
二杯酢わさひ

御飯

香の物
葉付大根
味噌漬茄子
花しほ

御坪
甘鯛
若なす
薄くず

御猪口　永楽染付角形
烏帽子貝
手丸うご
すのり
梅肉あへ

御平皿
うづら蒲鉾
新隠元
根芋

御白詰　今利赤畫大皿
鯛鹽焼

御臺引　交趾唐草蒔絵足付 取皿尾張やき龍丸摸様
大紅葉焼
花しそ
根引昆布

御取肴　今利赤畫大皿
孔雀玉子
海老眞丈
飛海付焼
鰹雲丹やき
白糸長芋
青梅
松露甘露煮

御鉢肴　今利唐草焼もの皿
鯛油やき
挽茶そば
かやくは
かけ汁

御指身
鯉子付
海松貝
生のり
胡瓜
煎酒わさひ

御燒肴
鱒鹽やき
金糸生姜
ふさふ甘露煮

御吸物
蛤
神馬草
いはひの粉

御浸シ物
糸三つ葉
貝栄
花栗

御箸洗
つく羽根
新冬豆
露生が

御水物
粽麩
色麩
砂糖かけ

御菓子

御薄茶

（以上）

當日禮節掛　古賀禮節師範

總掛　有住齊代理

有住常子

介添　淺田千賀子

介添　西村富子

本酌　有住久和宇子

加　杉原喜知子

通　小林眞子

通　松田糸子

（以下略之）

この度記事溜湊につき折形は省く

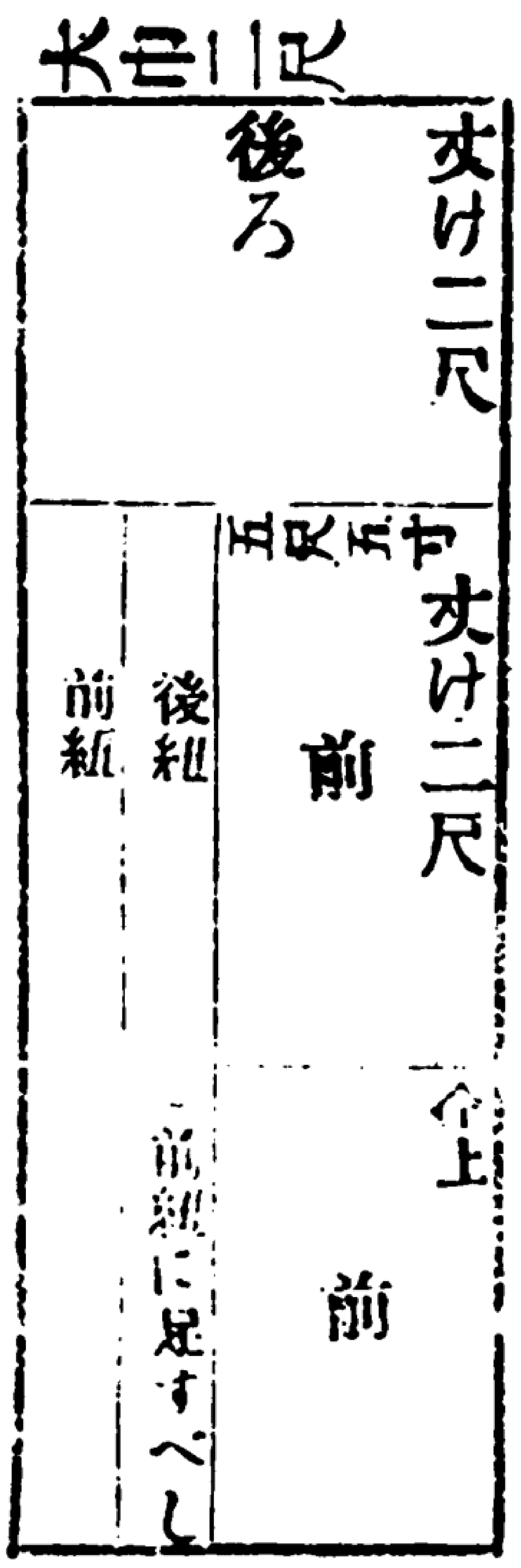
たちぬひ

西山たい子

（七十一）襠なし袴

襠なし袴は、襠をつけず、左右を別にせずして、たゝ袋の如きものに、ひだをとりたるものにて、俗にあんどん袴と云ふ、幼き子、或は女子のみのはくものなり。

まづ、その子の長幼に從ひて、丈を定め、大巾ものならば、後はその大巾のまゝになしおき、前巾一尺五寸ばかりなるを左右二つぶりとり、そのわきより前紐と後紐とをとるべし。但、之は十二三位までの子のにて、少し大人しき子には、やはり男子の如く裁ちて、襠を四五寸ばかりつけたる方恰好よきやうに覺えぬ。



但、寸尺等は長幼に應じて裁つべし。

造花

共立女子職業學校教授　伏見藤三郎

撫子

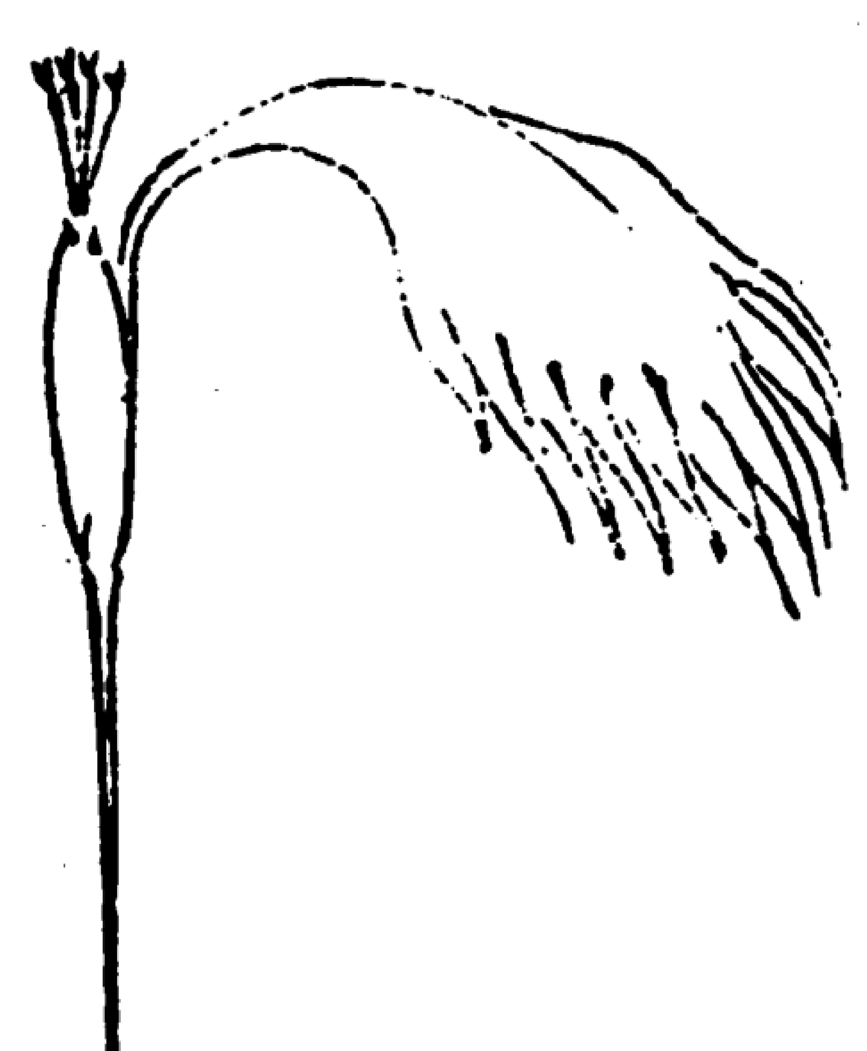
滿開花の造り方　花瓣には、寒冷紗。絖。又は天鵞絨を用ゐ（寒冷紗なれば元のまゝ。絖。天鵞絨は裏より薄糊を引き）て、第八十二圖の如き形に斷ち、

之を「ローザミン」にて、先薄く、元濃くぼかしに染め、倘、元の處は、黒インキにてぼかすべし。(總じて撫子は、種類數多ありて、色も各々異なれども、大抵實物を見計ひて宜しきに染むべし。こゝに示せるは、普通のものなり)色染終りて后、一筋の菊鏝にて、圖に示せる、先端切込の處を、一個づゝかはるく、表、裏より鏝をあて、中央は、裏より瓣鏝をあて、先端をそり反らす樣にすべし。斯の如くして、同じ花瓣五枚を造る。蘂は、カタン糸を、四五分の長さにして五六本を束ね、その先端には糊をつけて、山吹の眞(山吹の枝の内部に在る白き眞)を薑擦子にて細かくおろし「オウラミ」にて黄色くそめたるものを着け、元は針金にて括り、(その針金はそのまゝに縱に延して蘂の眞とす。夫より、蘂の上端三四分ばかりの處より、少しく長めに綿を卷きつけ、此の綿の上に、五方より適宜の配りに、前に造りたる花瓣五枚を着く。(第八十三圖參照)蕚は、第百十九號に示したる櫻の蕚と全じ樣にして少しく

第八十二圖



第八十三圖



細長くつくり、先を「ピオレット」にて薄紫色にそめ、前に着けたる花瓣の元に卷き付くべし。

半開花の造り方　花瓣の形は、滿開花と全じ樣に造り、色染も變ることなし、鏝も菊鏝を滿開花と全じ樣に使ひて、中央は表より瓣鏝をあてゝ内部に深く膨らますなり。蘂、蕚、まとめかた等總て滿開と全じ。

蕾の造り方　蕾は、滿開花の花瓣二枚を採り、裏より菊鏝にて、花瓣を斜めに捩りて強くあて、此のよぢれたる花瓣二枚を、表を外面に向けて、兩方より抱き合せて着け、之に滿開と全じ蕚を着く。

葉の造り方　葉は、寒冷紗を、「グリン」三分「オウラミ」三分「マセンタ」三分を混ぜたる液にそめ、實物を合して形に斷ち、裏より針金に靑紙を卷きたるものを着け、蠟を引き、后乾きたる筆に粉白粉をつけて葉の上を撫づるべし。莖には針金の眞に靑紙を卷きて、節々に葉を對生に着く、その他能く實物を見合して、纏め造るべし。



第八十四圖

だいどころ

プッチング製法

乾葡萄「プッチング」之を製するには、良き乾葡萄半斤の種を去り「リベス」半斤を能く洗ひ、批を除け。同斤の林檎の皮を剥きて、細かに刻み、同斤の麪包粉、三十匁の米利堅粉、四個の鷄卵、半斤の凝脂、天光上砂糖、小匙一杯の食鹽とを能くかきませ、之れを、内側に脂肪を引きたる壺に入れ、麻布にて覆ひ、凡そ四時間程湯煎にしたる後、壺のまゝ冷し置、覆布を去り、壺の上に皿を伏せ、皿と壺とを押へ、反覆し、壺を上げれば、「プッチング」は皿の中に殘るなり、之れに「ブランデー」ソースをかけて食すべし。

「リベスプッチング」先づ百匁の「リベス」を能く洗ひ、批を去り、之れに半斤の麪包粉、米利堅粉、凝脂、能程の桂子末、食鹽、及びおろしたる肉豆蔻とを加へ、牛乳一合を和して能混合し麻布にて包み、熱湯に投れて三時間程煮たる後、甘き「ソース」をかけて用ふべし。但麻布に包む前、其布を熱湯に浸し、水をしぼり、之れを鉢の中にひろげて、少量の米利堅粉をふりかけ、包むべし。

乳卵「フッチング」先づ、四個の鷄卵を割りて、其二つ分の白蛋を去り、能くかきませたる後、之れに大匙三杯の米利堅粉、十五匁の白砂糖と、能程の桂子末、おろしたる肉豆蔻とを加へ、牛乳一合五勺を注ぎて、能くかきませ、これも、蒸焼、又は、煮るべし。蒸煮にする時は、前法の如くにして、三十分時間を用ふべし。蒸焼なれば、凡二十分間とす。



學園

雨江未だこゝろよからず、なほ筆とる事叶はねど今一度かはりて

新古今和歌集講義（十一）

塩井ふく子

題しらず　　志貴皇子

岩そゝぐたるひのうへのさわらびのもえ出る春になりにけるかな

○此歌は万葉集八の卷にある歌なり。志貴皇子は天智天皇の御子、施基皇子の事か○岩そゝぐ「岩の上にながれかゝる」の意なり○たるひは、水の氷りて下がりたるものにて、つらゝと同じやうのものなり○さわらびのののはつけ言葉にて、他に意味あるにあらず、たゞ「わらび」と同じ意なり○もえ出る、先にもありし言葉にて「めざす」と云ふ意なり○成にけるかなのかなは歎息の言葉にて成つたわいと云ふ意なり

○一首の意は岩に流れそゝぐ氷りの上のわらびがいつのほどにか、めざす春に成つたわいとの意なり、氷りのとくるを、うちつけに云はずして、わらびがめざしきたと云ひしのみにて、氷りのとけしさまを、あらはしたるは、いと巧みなり。

百首歌奉りし時　　前大僧正慈圓

あまの原ふじの煙の春の色の
霞になびくあけぼのゝ空

○慈圓は關白忠道公の子初め西行法師によりて歌の道を學び、後に延曆寺の徒弟となりしとかや○天の原、「空」を云ふなり、天の原なると云ふべきを、なるを略して、天の原ふじと云ひしなり。此の如く略して云ふは、此の時分よりはじまりしなり○ふじのけぶり、ふじは「富士山」なり、むかし富士山は噴火山にて、たえずけぶりをはき居りしなり。けぶりののは、がと同じ意なり、これも富士の峯のけぶりと云ふべきを、此時代の癖にて、はぶきて云ひしなり○霞になびく「霞の心地になびく」と云ふ意なり○あけぼのの空は夜がほのかにあけんとするきはなり。その頃は煙りがたてに登らずして、横になびくなり

○一首の意は、大空に高くそびえをる富士山の煙が、いつか、春の色に同意して、霞の心地になびきて見ゆる、此のあけぼのの空との意なり

崇德院に百首歌奉りける時

藤原清輔朝臣

あさかすみふかく見ゆるや煙たつ
むろのやしまのわたり成るらん

○清輔は顯輔の子にて、尤和歌に秀ぐれて、俊成西行と並び稱せられぬ。此人、日夜、和歌に心を潛めて研究したり、人、或は、其才を試みんとて隱僻の言を以て、之に問ふに、應對流るゝが如くにして、毎時聞くものをして、おどろかせしと云ふ○朝霞、おなじ霞なれど朝故に、朝がすみと云ひしなり、深く見ゆるやのやは、見ゆるのはに、少し疑ひかゝりたるにて、「深く見ゆるやうなのは

との意なり○室のやしま、下野にありて、烟たつ處なり○わたりなるらん「あたりであらう」との意にて、二の句の、やをうけて、らんととめしなり。

○一首の意は此の朝、いづこも霞がひいてをる中にも、殊に深く見ゆるやうな處は、きつと烟がたつ、あの室の屋しまのあたりであらうとの意にて朝の空の霞深く、烟りとよく見わかぬ中にも、少しくことなりて見ゆるさまを、おもしろくよみ出でし歌なりけり。

晩霞と云ふ事を　後徳大寺左大臣

なごの海の霞のまよりながむれば
入日をあらふ沖つしら浪

○なごの海、北國のなごなり、攝津にも同じ處あり○霞のまより「霞の間より」との意なり○ながむれどむかしは歎息の意なりしを、此時より眺望の意にかはりたり、此處には眺望の意なり、

○入日は、夕方の日なり○沖津しら浪「沖のしら浪」なり

○一首の意は、なごの海の霞の間より眺望れど、ちやうど沖の浪が入り日を洗ふて居るやうに見ゆるとの意にて、山のある處にては、山の端に日がれつるやうなれど、海にては海の、中に沈むやう見ゆるなり、されど、入日が海の中にひたりれるさまをよみなせるにて、此歌下の句おもしろきものから、上の句、たゞつけしやうにて、わろしなど、難ずるものあり、さもあらんか、しかし、はでやかなるおもしろき歌なり。

漢文學講義（八）

大林弘一郎

六、松下禪尼　　黑澤弘忠

弘忠、字は脩玉、石齋と號す。通稱は伊勢次郎、出雲の人にして、松江藩に仕へたり。明暦寛文の頃の人なり。

松下禪尼者、秋田城介景盛女、北條時氏孺人、時頼母也。一日禪尼招子時頼。時禪尼手自補明障子之敗壞。禪尼兄義景曰、我有善工。命之。禪尼曰、其士豈賢我乎、不肯。間斷紙而貼之猶未止。義景曰、悉改冒、則色不斑而又不勞乎。禪尼曰、他日皆新之。今日惟如此而止耳。凡物小破之時、且加修理、可用也。是使少年覩學之、爲令熟工夫也。

頌曰、

富家之嫗、手親繕故。欲子以儉、愛衆無忤
夏后之室、般人之略。示後猶奢、淫虐無度

この篇も傳記の躰なり。末に頌一篇を附したるは、支那の前漢の劉向といへる人の著したる列女傳の中に頌を附し（魏の曹植が作）たるにならひたるものなり。頌は詩の一躰なること前にいへり。

松下の禪尼は、安達景盛の娘なり。秋田城介とは、むかしは、出羽の秋田城を守る役の名なりしが、後には、ただ空名となりて、この北條氏の時代には、その職にあるにあらずして、一の稱號となりしなり。北條時氏の孺人とは、夫人と同じことなり。夫人は、則、時頼の母なり。

ある時、禪尼、子の時頼を招きけるに、禪尼手づから明障子の破れたる所を補ひ居たる所に、禪尼の兄義景その日の手傳に來てありしが、之を

見て、我がもとに、さやうの事によくなれたる某といふものあり、これに命せられよといひしに、禪尼のいふやう、その人の細工、よも我にはまさらんやとて、うけひかず、なほ紙をきりてこれを貼ること止まざりき。義景またいふやう、みなを貼りかへたらむ、色も斑ならずして、しかもたやすく、力を勞することなからんと、禪尼いうやう、他日みな新に貼りかへ申すへし。今日ばかりは、わざとかくしておくべし。凡物は少しやふれたる所ある時に、先そこを修理して用ゐるべきことなり。これ若き人に見ならはせて、工夫に熟せしめんが爲にするなりといへり。

この事實は、昔より、名高き話となりしことなるが、そのもとは即、吉田兼好のつれ〴〵艸の中にしるしたる、これなり。今こゝに、その一節をあげて、和文を支那文に譯する一例にもなさんとす。

○相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さるゝ事ありけるに、すゝけたるあかりさうじの、やぶればかりを、禪尼手づから小刀して、切りまはしつゝ、はられければ、せうとの城介義景、其の日のけいめいして候ひけるが、給はりて、なにがし男にはらせ候はん、さやうの事に、心得たるものに候と申されければ、其の男、尼が細工によもまさり侍らじとて、猶一間づゝはられけるを、義景、みなを張りかへ候はんは、はるかにたやすく候べし、まだらに候も見ぐるしくやと、かさねて申されければ、尼も、後はさはさはとはりかへんと思へども、けふばかりは、わざとかくてあるべきなり。物はやぶれたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと、わかき人に見ならはせて、心つ

けんためなりと申されける。(以上の事實を譯したるなり。)いとありがたかりけり。世ををさむる道儉約をもとゝす。女性なれども、聖人の心にかよへり。天下をたもつ程の人を、子にもたれける、誠にたゞ人にはあらざりけりとぞ。

以上の文を見て、よく前文と對比し、其の譯し方をさとるべし。豈、猶、耳、惟、凡、且、是、などの文字の置方なども、亦、考ふべき事の一なり。

さて、これより、頌を解すべし。頌とは、ほめる心なり。故に稱贊の意を以て作るものなり。こゝにある頌は、則、禪尼の賢德を賛したるものなり。すべて頌なれど、詩と同じく韻字をふむものなれど、この頌も韻字を用ゐたり。(この韻字に付きての細しきことは、初學者には解し難きものなれど、少し進みて後に說くべし)この頌の第一二句、第四句、第六句第八句の下にある嫗、故、忤、輅、度、の五字が韻字なり。これは、七虞の韻の去聲、即、遇の韻にて仄韻なり。(字に平、上、去、入の四聲ある事も後にいふべし。)さて、この頌などゝいふものは、詩經などにもありて、極めて古き躰なり。古き躰の詩は、四言とて、四字を一句としたるが故に、この頌も、また、四言一句なり。

さて、富家と嫗とは、北條氏は鎌倉幕府の執權にて、代々威權を專にしたる家なれど、もとより富有なり。故に富家の嫗といふなり。嫗とはうばといふ字にて老婦のことなり。かゝる富家の老母が、手づから、親、故き障子を修繕して、いかにも節儉を尙ぶは、まことに珍しきことなりといふ意にて、この二句を作りたるなり。たゞ故といふ一字にては、何の事をいふか解し難けれども、故き障

子を貼りたる事實は前文に明なれど、こゝは、これにて十分明白なり。子に敎ふるに儉を以てしとは、即、時賴に敎ふるに節儉の道を以てしたることなり。衆を愛して忤ふことなしとは、時賴が後々まで老母の敎訓によく從ひて、節儉を守り、慈愛の心ふかくして、敎訓の趣意に忤ふ所なく、よくその家を保ちたることをいふなり。この二句にて、前二句の意をうけ、その敎育の結果を述べたるなり。さて、次には、支那の例を引きて、夏后の室、殷人の輅と列べあげ、彼の夏の君即、夏后氏禹の宮室を卑うして、儉素を尚ぶことを後世に示し、又、殷の時代の車、即、輅を質樸に造りて奢らざることを後代に示したるも、後世の國王が、次第に奢を窮めて、といふ意にて、後に示せども猶奢りと、前二句の意を承けて後の句を引き起させたり。さて、後の國王即夏の桀王、殷の紂王等が淫虐即たわけたる行、よこしまなる心をもて、多くの無道なる事をなし、人民をしひたげそこなひて極もなかりしかど、その身を滅し、國をも喪ひたりど、どこまでも支那の例とあげて、却りて北條氏の末代には、この禪尼が時賴に敎へたる節儉にして人を愛する道を忘れ奢侈を長じて、支那の夏の桀王殷の紂王と同じくその家も滅亡したりいふ意を含ませたり、この所よく考へて見るべし。抑、儉の美德たることは、今更にいふまでもなく、聖勅の中にも「恭儉己を持し」と宣らせ給へる大御心の程をうかゞひ奉りても、臣民の常に心すべき所なることを思ふべきなり。

正誤　前回「梅里云々」には、「梅里といふは、吳の泰伯の住みたる」の誤なり。

漫録



雨月物語

蛇性の婬（つゞき）

故人 上田秋成

賤しき軒にかゝまりて、生るこゝちもせぬを、翁、豊雄にむかひ、熟々その面を見るに、此隠神のために悩まされ給ふが、吾救はずぞ、つひに命をも失ひつべし、後よく愼み給へと云ふ。豊雄地に額着て、此事の始よりかたり出て、猶命得させ給へとて、恐れみ敬まひて願ふ。翁、されぞこそ、此邪神は、年經たる蛇なり。かれが性は、婬なる物にて、牛と交みては麟を生み、馬とあひては龍馬を生といへり。此魅はせつるも、はた、ろの秀麗に姧たると見えたり。かくまで狖ねきをよく愼み給はずぞ、おそらくぞ命を失ひ給ふべし。と、いふに、人々いよ〳〵恐れ惑ひつゝ、翁を崇まへて、遠津神にこそと拜みあへり。翁、打笑ておのれは神にもあらず。大倭の神社に仕へまつる、當麻の酒人といふ翁なり。道の程見たてゝまゐらせん、いざ給へとて出たてぞ、人々後につきて歸り來る。明の日、大倭の郷にいきて、翁が惠みを謝し、且美濃絹三疋、筑紫綿二屯を遺り來り、猶、此妖災の身禊し給へと、つゝしみて願ふ。翁これを納めて、祝部らにわかちあたへ、自は一疋

一屯をもとゞめずして、豐雄にむかひ、畜、儞が秀麗に奸けて儞を纒ふ。儞、又畜が假の化に魅はされて、丈夫心なし。今より雄氣して、よく心を靜まりまさむ、此らの邪神を逐はんに、翁が力をもかり給はじ、ゆめ〱心を靜まりませとて實やかに覺しぬ。豐雄夢のさめたるこゝちに、禮言盡ずして歸り來る。金忠にむかひて、此年月畜に魅はされしは已が心の正しからぬなりし、親兄の孝をもなさで、君が家の蓋ならんは由縁なし、御惠いとかたじけなけれど、又も參りなんとて、紀の國に歸りける。父、母、太郎夫婦、此恐しかりつる事を聞て、いよゝ豐雄が過ならぬを憐み、かつは妖怪の執ねきを恐れける、かくて鰥にてあらずるにこそ、妻むかへせんとてはかりける。芝の里に、芝の庄司なるものあり。女子一人もてりしを大内の采女にまゐらせてありしが、此度いとま申玉はり、此豐雄を聟がねにとて、媒氏をもて大宅が許へいひ納る。よき事なりとて、即、因みをなしける。かくて都へも迎の人をのぼせしかば、此采女富子なるものよろこびて歸り來る。年來の大宮仕へに馴にしかば、萬の行儀よりして、姿なども花やぎ勝りけり、豐雄こゝに迎へられて見るに、此富子がかたちいとよく萬心に足ひぬるに、かの蛇が懸想せしこともをろ〱いひ出るなるべし。はじめの夜は、事なければ書ず、二日の夜よきほどの醉ごこちにて、年來の大内住に、邊鄙の人は、はたうるさくまさんかの御わたりにては、何の中將宰相の君などいふに添ぶし玉ふらん、今更にくゝころれはゆれなど戯るゝに、富子、即、面をあげて、古き契を忘れ玉ひて、かくことなる事なき人を時めかし玉ふこそ、こなたよりまして惡くあれといふは、姿こそ

かはれ、正しく眞女子が聲なり、聞に、あさましう、身の毛もたちて恐しく、只あきれまどふを、女打ゑみて、吾君な、怪しみ玉ひぞ、海に誓ひ山に盟ひし事を速くわすれ玉ふとも、さるべき縁にしのあれば又もあひ見奉るものを、他し人のいふことをまことしくれはして、強に遠ざけ玉はんには、恨み報いなん、紀路の山々さむかり高くとも、君が血をもて峯より谷に灌ぎくださん、あたら御身をいたづらになし果玉ひぞ、と、いふに、只わなゝきにわなゝかれて、今やとらるべきこゝちに死入ける。屏風のうしろより、吾君いかにむつかり玉ふ、かうめでたき御契なるはとて出るはまろやなり。見るに又膽を飛し、眼を閉て、伏向に臥す。和めつ驚しつ、かわる／＼物うちいへど、只死入たる様にて、夜明ぬ。かくて閨房を免れ出で、庄司にむかひ、かう／＼の恐しき事あなり、これいかにして放なん、よく計り玉へといふも、背にや聞らんと、聲を小やかにしてかたる。庄司も妻も、面を靑くし、歎きまどひ、こはいかにすべき、こゝに都の鞍馬寺の僧の、年々熊野に詣づるが、きのふより此向岳の蘭若に宿りたり、いとも驗なる法師にて、凡疫病、妖、災蝗などをもよく祈るよしにて、此鄕の人は貴みあへり。此法師請へてんとて、あはたゞしく呼つげるに、漸して來りぬ。云かく／＼のよしを語れば、此法師鼻を高くして、これらの蠱物らを捉んは、何の難き事にもあらじ、必靜まりれはせとやすげにいふに、人々心落ゐぬ。法師まづ雄黃をもとめて、藥の水を調じ、小瓶に湛へて、かの閨房にむかふ。人々驚隱るゝを、法師嘲わらひて、老たるも童も、必そこにれはせ、此蛇只今捉て見せ奉らんとてすゝみ行く、閨房の戸あくるを

運しと、かの蛇頭をさし出して法師にむかふ。此頭何ばかりの物ぞ。此戸口に充滿て、雪を積たるよりも白く輝々しく、眼は鏡の如く、角は枯木の如、三尺餘りの口を開き、紅の舌を吐て、只一呑に飲らん勢をなす。あなやと叫びて、手にすゑし小瓶もそこに打すてゝ、たつ足もなく展轉びはひ倒れて、からうじてのがれ來り、人々にむかひ、あな恐し、祟ります御神にてましますものを、など法師らが祈奉らん。此手足なくぞ、はた命失あひてんと、いふ〳〵絶入りぬ。人々扶け起すれど、すべて面も肌も、黒く赤く、染なしたるが如に、熱き事焚火に手さすらんにひとし。毒氣にあたりたりと見ゑて、後は只眼のみはたらきて、物いひたげなれど、聲さへなさでぞある。水灌ぎなどすれど、つひに死ける。これを見る人いよゝ、魂も身に添ぬ思ひして泣惑ふ。豐雄すこし心を収めて、かく驗なる法師も祈り得ず、猶ねく我を纒ふものから、天地のあひだにあらんかぎりは探し得られなん、おのが命ひとつに、人々を苦しむるは實ならず。今は人をもかたらはじ、やすくおはせとて閨房に行くを、庄司の人々こは物に狂ひ玉ふかと云へど、更に聞ず顔にかしこにゆく、戸を靜に明れど、物の騒がしき音もなくて、此二人ぞむかひゐたる。富子、豐雄にむかひて、君何の讐に我を捉へんとて人をかたらひ玉ふ、此後も仇を以て報い玉はゞ、君が御身のみにあらじ、此郷の人々をもすべて苦しきめ見せなん、ひたすら我貞操をうれしとおぼして、徒々しき御心をおぼしぞと、いとけさうしていふぞうたてかりき。豐雄いふは、世の諺にも聞ることあり、人かならず虎を害ずる心なけれども、虎反りて人を傷る意ありとや、儞人ならぬ心

より、我を縛ふて、幾度かからきめを見するさへあるに、かりそめ言をだにも、此恐しき報をなんいふは、いとむくつけなり。されど、吾を慕ふ心は、はた世人にもかはらざれど、こゝにありて人々の歎き給はんがいたはし、此富子が命ひとつたすけよかし。然、我をいづくにも連ゆけといへど、いと喜しげに點頭をる。又立出て庄司に向ひ、かう淺ましきものゝ添てあれど、こゝにありて人々を苦しめ奉らんはいと心なきことなり。只今暇給はらば、娘子の命も恙なくおはすべしといふを、庄司更に肯ず、我弓の本末をも知りながら、かくいひがひなからんは、大宅の人々のおぼし心もはづかし、猶計較なん。小松原の道成寺に、法海和尙とて、貴とき祈りの師おはす。今は老て、室の外にも出ずと聞ど、我爲にはいかにも〳〵捨給はじとて、馬にていそぎ出たちぬ。

道遙なれど、夜なかばかりに蘭若に到る。老和尙眠藏をゐざり出で、此物がたりを聞て。そはあさましくおぼすべし、今は老朽て驗あるべくもおぼえ侍らねど、君が家の災ひを默してやあらん、まづおはせ、法師も即、詣なんとて、芥子の香にしみたる袈裟とり出て、庄司にあたへ、畜をやすくすかしよせて。これをもて頭に打被げ、力を出して押ふせ給へ、手弱くあらば、おそらくは逃去らん、よく念じてよくなし給へ。と、實やかに敎ふ。庄司よろこぼひつゝ、馬を飛してかへりぬ。豊雄を密に招きて、此事よくしてよとて、袈裟をあたふ。豊雄これを懷に隱して閨房にいき、庄司今はいとまたびぬ、いざたまへ、出立なんといふ。いと喜しげにてあるを、此袈裟とり出て、はやく打被げ、力をきはめて押ふせぬれど、あな苦し、儞何とてかく情なきぞ、しばしこゝ放せ

よかしといへど、猶力にまかせて押ふせぬ。法海和尙の輿やがて入來る。庄司の人々に扶けられて、こゝにいたり給ひ、口の中につぶ／＼と念じ給ひつゝ、豊雄を退けて、かの袈裟とりて見給へど、富子は現なく伏たる上に、白き蛇の三尺あまりなる蟠りて、動きだもせずてぞある。老和尙これを捉へて、徒弟が捧げたる鐵鉢に納給ふ。猶念じ給へど、屏風の背より、尺ばかりの小蛇はひ出るを是をも捉て鉢に納給ひ、かの袈裟をもてよく封じ給ひ、そがまゝに輿に乘せ給へど、人々手をあはせ、涙を流して敬まひ奉る。蘭若に歸り給ひて、堂の前を深く堀せて、鉢のまゝに埋させ、永劫があひだ世に出ることを戒しめ給ふ。今、猶、蛇が塚ありとかや。庄司が女子は、つひに病にそみてむなしくなりぬ。豊雄は命恙なしとなんかたりつたへける。

浮世いかた舟（續）　作者不詳

名馬の用にたゝざる事

今はむかし、ある大名きはめてよき名馬をもとめて、わか一大事のせんとみるべき物は、此馬也とてひざうせられ、馬のかひれうとて、米まめじゆんたくにあてがはれしに、馬かひの者それをみなへぎて、おのれが德とし、馬には、わづかに、草のかゆとばしき程にあたへてかひをきぬ。案のごとく天下みだれて、いくさにおよぶ。馬をひざうせしは此たびの事なりとて、かの大名くだんの馬に召れしに、馬のかんもことの外にぶく、はねをどるいきほひもなし。大名大にいかりて、かゝる用なき馬とは思ひもよらず、いたはりてかはせけるよとて、むちにてさん／＼にうちければ、此馬、人のごとくにものいふて、

いかに殿もよく聞き給へ、馬飼さらに食をれしみて、腹にあくはぞあたへたる事なし、さるまゝに、力もよはく、心もいさます、道もゆかれず。と、つげ侍れりと、ふるき人のかたられし。かのれ大名の家中をせめはたり、百姓をこきとり、情なくふるまひ給ふを、家中のものは、浪人すれど、又かゝへらるゝ事まれなり、飢ゑてたへ死なすは力をよぞすと思ひて、かんにんはいたせ共、まことの一大事にのぞみて、そのれ大名に思ひつかす、かの名馬のごとくに、用にたゝぬものとなり、をしきるべきいくさ場をもにげくずして、みかたの利をうしなはするやうにならんこと、めの前にみゑたれども、のちは後、今はいま、當座の德のゆくこそよけれと、思召すかしこしや。かまくらの一年づめに、御うちの侍共は、ちやうちんはぞなる火かぶりて、身上はすりきりはつるゆゑに、むかふすねをけづりて薪にする心ぢぞしける。楚國の粟は金をかしき、薪はらふをたくとへる事、けにことわりかな。鎌倉は、諸國のつきあひ晴かましく、人のいりこむ事たはけれど、米、薪、酒、さかなまでも、ねだんことの外にたかけれど、諸人大につまりて、さしもひろき世の中、さながらひとつどしの如く思はれて、わたりかねたる有さまにて、すむだかりなる名所かなと、浮世の人はつぶやき居る。

喧嘩して浪人しける事

今はむかし、奉公人のはうぞいのつきあひには、よく心を付て、人の目いろをみるべき事なり。心のそこはたくびやうにて、外にかんこつの躰をあらはす者も有。外はいかにも物やわらかにして、うちにきぶんのあらきものあり。もとより物にかまわぬ人有。それ、人のたもてのたなじきものなきがごとく、心

も亦ひとしきものにあらず。人によりて、生れつき心々は別なるぞかし。ざれ事もつよくこうずれどもさかひとなる。わる口もさしあひあれどもけんくわのたねなり。だゞ侍のつきあひは無禮をいましめ、時義を本とし、わすれてもいつわりをかまへず、正直をもつてれもてとし、したしむやうにていんぎんに、しんじつにしてうとからず、かねてよろづをつゝしむ時は、末久しくかたらひ、中たがふ事是なし。然るに、へう太郎、おのれ心うごめくまゝに、あるりちぎなる侍にざれことをしかけ、わる口をはきちらす、目の色も見ず、ひたものにこうじければ、此人はらだちて大わきざしをぬき、むねうちに十四五つゞけてうちしかど、じたい親に似てれくびやうの者也ければ、うちころさるゝことと思ふより、手足もなくて、はふ〳〵にげてたちのき、もはやほうこうもならざりければ、それよりすぐに山ごしして、あとをも見かへらず、あしにまかせて京をさしてにげかへる。今は男もならずとて、心もすゝまぬ道心をれこしければ、和尚、すなはち、かみをそりて、戒名を夕春とつけられたり。瓢太郎心に思ふやう、此戒名のよみでゐのきたなさよとて、和尚に參りて、とかく此戒名をかへて給はれといふ。和尚のたまはく、春宵一刻價千金といふ詩の心によりてつけたる名なり。夕春ゆふべのはるとよむ。是まことにやさしき名也と仰らるゝに。いや〳〵、それがしよみてみれば、ことの外きたなくれかしうよめ侍ると申。さて何とよみたるとの玉へば、夕春は「ぞたかす」とよむと申。それはいかなる故ぞとはるれば、七夕のたの字と、春日の春の字也、とかく此名しかるべからずとて、みづから浮世坊とぞつけにける。

年中風雨考節錄（續）

井上賴文寄贈

天保十二年辛丑歳晴雨考

正月小　此月亥の日三つあれど、今年大水ありといふ。又、今月卯の日三つあれど、豆安しといふ。又、今月上旬に月暈あれど、樹木に虫を生ず。今月雷あれど、米價高し。又、雪早く消ゆれば豐年なり。元日丁亥晴冷なり。今日東北風は主二年豐一ナ、西北風は大水、四方有二黃雲一主レ熟、青は主レ蝗、赤は主レ旱、東方に有レ雲歳澇雨主二春旱一、虹は主レ旱、大雪は年豐なり。又、今日より十三日迄毎朝六つ時に、井水を量り試み、其の輕重を見て、今年毎月の雨の多少をしるべし。水重けれど雨多し。則元日を正月とし、二日を閏正月とし、次第して十三日を十二月とするなり。二日晴暖なり、今日、戊子に當る、蝗ありといへり。三日風ありて陰天なり、今日雨ふれど米穀高し。四日晴暖なり、今日卯に當れど主二大水一とあり。六日雨天、今日辰に當る年豐なり。七日十方暮をはり。八日烈風、今日雨降れど長し、今日を穀日といふ、雨ふれど凶年、晴天なれど豐年なり。九日前に同じ、又、今日海上を愼むべし。十日暖なり今明日風あれどつよし。十一日冷なり。十二日風雨。十三日烈風。十四日晴暖なりといへり。立春正月節己五刻、今日子に當る雨あり。十五日風雨、今日を上元とす、晴天なれど三春少雨百果熟す。十六日烈風今夜晴天なれど旱多し、風西北より吹けど尤よし、今日壬寅に當る、今日米高けれど年中壬寅の日に高しといふ。十七日寒風、今日を秋收日といふ。晴天なれど秋に至り百果蕃茂す。十八日風つよし。十九日冷なり。廿日前に同じ、今明日の内風

雨の變あらん。廿一日晴暖なり。廿二日前に同じ、今明日の內風あれどつよし。廿三日風雨。廿四日烈風。今日雨ふれど長し。廿五日冷風。廿六日風雨、今日より閏正月八日迄八專なり。八專中米高けれど六月まで高し。廿七日風つよし。廿八日冷なり、今明日の內雨天なれど夏に至りて五穀高し。廿九日晴暖なり、雨水正月中申二刻、今日風の變あるべし。

○閏正月大　春の閏月は豐年なりとあり。

朔日晴暖なり、今明日の內風雨の變あるべし。二日風雨、今日雨ふれど四十五日日を見ず。三日風又は地震。四日冷なり。五日風雨、今明日の內風あれどつよし。六日風つよし。七日冷なり。八日晴暖なり八專の終。九日冷なり、今日雨ふれど旱なり、雷あらど豐なり、又今日風の變を恐るべし。十日風雨。十一日晴暖なり、今明日の內風雨の變あるべし。十二日風あり。十三日前に同じ。十四日晴暖なり。十五日晴天雲多し。十六日暖風。十七日前に同じ、今明日の內風あれどつよし。十八日陰天。十九日暖風。廿日晴天にして雲多し。廿一日陰天、今明日の內風雨の變あるべし。廿二日暖雨。廿三日晴天にして雲多し。廿四日暖風、今日卯に當る風雨ありといふ、又今日風あれど、今年大風ありといふ。廿五日前に同じ。廿六日陰天、今日より二月二日迄ひがん。廿七日暖雨。廿八日雲多し。廿九日陰天、今明日の內風あれどつよし、今日風雨あれど米穀俄に高し。三十日暖雨、今日酉に當る、ひがん中に酉あれど大風ありといへども秋のひがんに酉なければよし。

二月小　今月西に虹あれど五穀高し、又今月雷發して聲和らかなるは豐年なり、又雷艮方よりれてこれど豐年なり、東も同じ、南よりは旱北は雨しげし、

今月雪ふりて七日消ざれど凶年なり
○朔日雲多し、春分二月中丑四刻に入、朔日春分あるは歳歉を主どるといへり、今日東風吹けど豊年也、又今明日の内風雨の變あり。二日暖風。三日曇暖、社日なり。社日春分後にあれど年よろしからずといふ。又今日多くは雨ふるといへり。四日暖天にして雲多し、今日丑に當る雨ありといへり、又今日雨ふれど米穀高しとあり。五日暖雨。六日晴冷。七日陰天、今日風の恐あり。九日暖天にして雲多し。今日雨ふれど長し。十日暖雨。十一日まへに同じ、今明日の内風あれどつよし、被岸櫻花盛り。十二日暖風、今日を花朝といふ、天晴れど百果實る、尤夜雨を忌、今夜晴れど一年晴雨調匀なり。十三日陰天。收花日とす、晴明によろし。十四日暖天にして雲多し。十五日晴冷、今日もまた花朝といふ、晴天なれど百花成る事あり、月に光りなけれど凶年なり。十六日陰天、晴明三月節辰一刻、今日晴天なれどよろし、雨ふれど百果損す、今日雨ふれど梅雨多し、又今日桐花なけれど冬寒多し、櫻初咲。十七日雲多し、今日風の變を恐るべし。十八日暖雨、櫻花さかり。十九日まへに同じ。廿日暖風。廿一日まへに同じ。今明日中風あれどつよし、桃花さかり。廿二日晴煖、廿三日曇暖、今明日の中風あれどつよし。廿四日陰天。廿五日暖天にして雲多し、今日雨ふれど長し。廿六日暖雨。廿七日陰天、今日より三月九日迄八專。廿八日雲多し、土用午二刻に入今日丑に當る雨ありといへり。廿九日暖風、今明日の中風あれど夏に至りて五穀高し、多くは風の變あり。

三月大　今月雹多けれど年豊なり、今月霜ふれど後必雨あり朔日晴風、今日雷なれど旱多しといふ。

又今月三卯有り麥豆によろしといふ。今日虹あれど穀類高し。二日晴暖。穀雨三月中午六刻に入、今日風の變あらん。三日陰天、今日雨ふれど豐年、晴天なれど旱なり。四日暖雨、今日雷あれど大豐なり。五日暖風。六日陰天。今明日の中風あれどつよし。七日暖天にして雲多し、今日風の變あらん。八日暖風。九日雲多し、八專のをはり。十日暖風、今日雨ふれど旱なり、雷あれど豐なり。十一日陰天、今日を麥生日といふ、晴天によろし。十二日晴暖。十三日暖天、八十八夜。十四日暖雨、今日辰に當る風雨なりとあり。十五日曇天、今日風の變あらん。十六日雲多し。今明日の内風雨の變あらん。十七日冷也、立夏四月節酉三刻に入、今日晴天なれど旱を主どる、雨天なれど大によし、今日巳の時東南に青雲あれど大豐年なり。十八日まへに同じ、今明日の中風あれど強し。十九日雨天。廿日晴暖なり。廿一日風つよし。廿二日雨天。廿三日暖風、今日風の變あらん。廿四日風つよし、今明日の中風雨の變あらん。廿五日冷なり。今日風あれば今年大風ありといへり。廿六日まへに同じ。廿七日雨、廿八日冷風、今日海上を愼むべし。廿九日晴暖なり。三十日雨天、今明日の中風あれどつよし、今日風雨あれど米穀俄に高し。

〇四月小　今月の内壬癸の日に當りて日暈あれど主江河決溢大寒、主旱、今月虹あれど米高し、今月田植時分地震あれどよし。

朔日暖風、今日日に暈あれど洪水あり、又今日海上を愼むべし。二日烈風、今日雨あれど主歳大熟。三日冷なり。四日晴暖。今日を稻生日といふ。晴天なれど稻によろし。今日子に當る雨ありといへり、今明日の中風雨の變多し。五日風つ　し。六日冷風、今

明日の中雨ふれど麥安し。七日晴暖。八日雨天、今日海上を愼むべし。十日風つよし、今日雨ふれど長し。十一日前に同じ。十二日暖風、今明日の中風あれはつよし。十三日冷なり、今日雨あれど麥收らず。十四日曇天、今日晴天なれど年豐なり。十五日風つよし。十六日晴暖なり。十七日晴天。十八日曇天。今日を入梅とす、今日晴天なれど年豐なり、梅雨中冬春花開けど旱を主どる。十九日風あり。廿日まへに同じ。廿一日陰天。廿二日まへに同じ。廿三日陰雨、今日より梅雨の氣盛なり、又海上の愼あり。廿四日前にをなじ、今明日の中風あれどつよし。廿五日晴天にして雲多し。今日海上をつゝしむべし。廿六日陰冷、今日雨ふれど長し。廿七日風あり。廿八日雲多し。又今日より五月十日迄八專、今日子に當る雨ありといふ。廿九日曇天にして折々小雨。

高崎正風大人講話筆記 明治廿九年四月十八日夜於宇田翁宅

先夜、宇田君、近藤君等に、歌道に就きて物語せし事ありしに、同じくは、同好の人達にも聞かせまほし、今一度斯道の方針をも示されよと同君等の勸に從ひ、今夜は、諸君に、聊申試みむとす。これ、斯道のため辭退すべからざる事なればなり。

己が御歌所長なる故に、必斯道に深きものならむとな思ひたまひぞ。今夜申さむとする事も、決して珍しき新説などは無く、只、陳腐なる、古今集の序の事を聊述べむとす。

さて、彼の序は、歌よまむ程の人は、誰も、誰も、夙く讀味ふものにて、決して珍らしきものにはあらざるものから、又疑はしきふし〴〵無きにしもあらず。己、多年、彼の序文に心醉して、聊考得つ

る事ありしが、彼の序に心酔せる理由をも申置かむ。もと、己は、薩摩の田舎に生れ、八田知紀翁に就きて、聊、歌よむ事を學びしのみ、然るに、その頃より、少しはよむといふ事を人に知られたりしにや、さきに、左院より宮内省に轉じ、侍從番長となりて、初めて御學問所にて拜謁仰せつけられし折、御前に鉢植の牡丹ありけるに、この歌よみて奉れと仰せごとありて、大に困難せし事ありき。その歌なども、もとより好き歌にあらざりければ、今は記臆しをらず。これ、己が、はじめて、宮中にて歌めされし事のもとなり。その後、屢、御製に就きて御諮問を蒙り、頻に辭退し奉りつれど、御許無く、つひに御歌所長をさへ御請申上くる事とはなりぬ。その理由は、こと長けれどこゝに述べず。さて、それより後はいたく苦心せし事なみなみならず。その頃、師とし事へむ人もなく、又、朋友にも然るべき相談相手なし、さりとて、自分一己の意見をもて、御諮問に應じ奉らむには、上を迷はせ奉らむ恐あり、旁思ひめぐらして、只、古の名人のいひ殘られし事を吟味し、中にも、彼の序を幾度となく繰返して讀味ひしに、今迄の疑團も、少しづゝはれ行きて、歌の眞面目をも、かつがつ知られ行く事となりぬ。猶、今に工夫を怠らねども、先、大体の方針は定まりたれど、御歌所にきても、明治十年以來の方針は動かず、歌の撰び方も、これによる事となりたるなり。

却說、此度は、病後保養の爲に、紀州湯崎の温泉に在りしが、旅寓を屢訪はるゝ宇井八十一郎可道といふ人ありき。至極の歌好にて、いつもいつも、斯道の話のみせられき、この人は、熊代繁里の門人にて、熱心なる事と、記臆強くて古歌などを暗誦する事と

は、實に感ずべき人なり。この人始終斯道の流派に就きて彼是といはれ、切に己の説をもとめて止まざれど、己いはく、歌に流義といふ事あるべきかは、師弟といふ事あるべきかは、もし流義といひ、師弟といふもの丶必要ありといはゞ、古の名人達をいかにせん、人丸、赤人、貫之、躬恒などは、師匠もなく、弟子もなきにあらずや、これ明らけき證なり、只、後世に至りて、師に就きて學ばざるを得ざる事となれるは、全く歌と人と別になり、詞に雅俗の差別起り、又、學者達、勤めて雅俗の間を離隔せしめし故なり。故に、今日にては、師に就く事をあしといふにはあらねども、徒に流義爭などをして、斯道の本意を失ふは、歎くべき事なり。ついでに、今古の序に「世の中にある人ことわざしげきものなれば心に思ふ事を見るもの聞くものにつけていひいだせるなり」とあるに就きて一言申すべし。そもそも、古來、歌論の書少きにはあらねども、斯道の眞面目を説得て、餘蘊なきは、ひとり紀貫之ぬしなり。その説の眼目はこの序にして、この序の眼目は實に右の一段にあり。よくよく心をとめて見るべし、今の人は、常に事務繁多なるをもて、歌よむ暇なしといふ。然るに、紀氏は「ことわざしげきものなれば云々」といはれたり。このどの辭よく味ひ見るべし。この紀氏の意を敷演していはゞ「世の中にある人はことわざしげきものなり。しかくことわざしげきが故に、思ふところ、感ずるところを、見るもの聞くものにつけていひいだせるにて、ことわざしげきによりてこそ歌は出來るものなれ、無事安穩にて、心に物思のたねなき折には、嘆聲の發すべきあらざれば、歌の出來べき筈なし」すなはち、「忙シイカラカウカウシテ歌ガ出來ル

ノヂヤ暇デハ出來ナイ」といふ意なる事明らけし。ここにおいて、今人の說と、紀氏の言とは、全く反對せり。不審の事にあらずや。是、全く紀氏のいふ所の歌と、今人のいふ、所の歌と、大に相違する所以なり。然らむ、紀氏の云ふ所の眞の歌とは如何なるものなるかといふに、他なし、人情が本となりて出來たる歌なり。すべて歌といふもの丶出來る場合は、物にふれて、人の心に喜怒哀樂を感ずると同時に、うたわる丶ものにて、彼の雅言を撰び、巧を競ひて、とかく按しめぐらしつ丶、已が心にも無きことを述ぶる人情外の歌は、眞の歌にあらざるなり。歌は、雅言に限るものならむこそあらめ、紀氏も曾て「みやびこそをもて」など云はれたる事なし。萬葉古今の詞は、萬葉古今時代の平言なり。

さて、又、前段の意を繰返して、「心に思ふことを云々」とあるにつきていはむ。れはよそ、此の世にあるもの、畏ながら、上天子をはじめ奉り、下庶人の末々に至る迄、一人として遊びて世を渡る者なく、又、遊びて世を渡る理なし。皆その身の分限に隨ひて、職業といふものあり。その職業もて社會に立つ上においては、いつも都合好き事ばかりにてはなく、必、意の如くならぬ事あるものなり。是すなはち世上の常態なり。天子には天子の御物思あらせらるべく、庶人には庶人と、皆その身の程々につけて、相應の物思あり。これによりて、思ふ心の聲にあらはれて、歎息を發するが、やがて、歌なり。倫理の交際上には、悲喜憂樂かぎりなき思あり。ろの他、花鳥風月につけて、感慨を惹起すは、有情の人の常なり。故に「心に思ふこと」とは「心に感ずること丶心得べし。これにて、暇を得ねば出來ぬ歌と、

然らずとも出來る歌との差別、又、古人の歌と、今人の歌との差別も、おのづから瞭然たらむ。宇井氏こゝに至りていはく、高説によりて、はじめて會得したり。これ迄は、只外面よりの修業にて、心中に立入りての學問は、今日がはじめてなり。この真理を聞得たる以上は、今後己れも眞正の歌をよみ出づるやうつとむべしとて、いたく喜ばれき。（未完）

王昭君

石榑千亦

後宮の制みだれて、侍妃多きこと三千人、おのおの種々かまへて、御前に召されむことをたばかり、額には角こそはやさね、心にはいつも炎をもやし、後宮はさながら鬼の棲所なして、全く嫉妬の府とぞなりぬる。

王氏昭君も亦その一人なりけり、されど其三千人の中には算まへらるべきにあらず、否、算まへらるゝとも、鬼の如きものならねばなり、嫉妬がましき心をもたねばなり、彼は琵琶の小琴の清き音をめでゝ、うき世をよそにしたればなり。

名のみなる侍妃は、幾年を經れども王に見ゆることを得ぬが多かりき、こはもとよりさることにて、いかに榮耀を弄ぶべき、一人の王の、いかで數も限もなき侍妃を召すことを得べき、さては實なきに陥るもせむなき所なり、王のあらぬ心はいやまさりにまさりて、あるが中にみめかたちのすぐれたるを撰り出でむとて、その姿をうつして奉らしめぬ。已れこそと日ごろ思ひたりし人とも、とりどりに畫工に賄賂て、さる方にゑがゝしめけれど、俄に富さかねて、金の藏あまた建てつらねぬ。王氏の勅なれど、

姿こそうつさしめたれ、そのきたなきわざには與らず。

漢廷の外交は、後宮の制とともに亂れぬ、中華とはこり、匈奴といやしめてのみもゐあらずなりぬ、單于の爲には中々に貢物をたくりて、信をもとむる事の已むを得ざるに至りぬ、こも仝しく鼻の下の髯をはらふ材料として、侍妃を賜ふことになりぬ。王は例の畫姿を覽はし、最醜きを撰び出で丶まかるべしと、おほせ言す。王氏それにあたりぬ。辭みまつるべき道にもあらねど、なく〳〵入りて、みわかれ奏し奉る、力なげなる身体の光は、なほ重ねたる衣をとほすべく、烏羽玉の黑髮は、わざとにはあらで愁にみだれたる、中々に見處あり、誠に天の原の上まで、底つ國の下まで、いかに尋ねもとむとも、又とあるまじき美婦人なるに驚き、畫姿をとりてためつすがめつ覽はせど、まことに雪を炭とあざむけり。恨み給へども、悲しみたまへども、今は及はず、遂に匈奴に下し給ひぬ。畫工を罪して、八裂となし給ひつれど、恨みも悲しみも晴るヽよしなく、はた及ふべくもあらず。

あわれ王氏がその道すがらやいかなりけむ、こも君のため國のためと思ひあきらめしなるべし、思ひあきらめしとはいへ、今日は漢宮の侍妃にして、明日ははや匈奴の妻となるを思へど、小琴のみこそかたみにもちたれ、これもけふを着をさめかと思ふ漢宮の衣の汚ちなむをも知らざりけむ。れもひやるたに袂の濕ふを知らず。

さはいへ、漢王のため、あらず、王氏の爲には、幸なき中の幸とやいふべからむ、そをいかにといふに、もし畫工にしてありのまヽにうつしたらむには、日

にけに御前に侍ひて、いかにればなめでたく、いかに時めくらむも知るべからねど、そは常の妃にて終りしならむ、世にはこの類少なしとせず。されど一たび胡地に下りて、夷狄をあやなし、手馴せる琵琶の小琴をかなづる中に、愛に漢國との縁の糸をつなぎ、身の在る間は、漢國が北顧の憂を絶ち、あつく交を結むしめぬ。其功いかで彼の宮廷に侍ふらむ文武官などの夢にも思ふところならめや、況して侍妃をや。さては王氏は遠く外國にありて、よく功を内廷につくし國のため君のために、よくその身を顧みざりしものとこそいふべけれ。澆季の世にありて、さむかりの女丈夫、さむかりの大忠臣ありしを、喜むではなあらじ。見よかれの節に斃れしも、なほ死してその忠をなさむと企てしに外ならざりしを。もし彼れが平らかに事なく、漢宮にありたらむには、もとよりこの功あるべくもあらず、あらざるのみならず、書のために欺かれて、一生一たびだに召されざりしやも知るべからず、遂には嫉妬の毒焔にかゝるか、はた鬼の釜中に焔りて、身を亡ぼすに至らさらんよりは幸なり。兎まれ角まれ彼は普通の侍妃にふさはしき性質ならねむなり。

王氏の閼氏みまかり、國中擧りてそを葬り、琵琶の小琴の傳へて漢宮に還りし時は、宮廷ふるひなかざるものなかりきとぞ、こも匈奴にものせし賜物にあらずや、もしありしまゝならむには、その小琴さ遂に天下に鳴るものならざりしならむ、あはれ。

暴風のたまもの（續）

三好越南

一同は、此の島の東端なる内浦といふ處に上陸せし

が、固より內地と來往も稀なることとて、別に旅店もあらず、殊に多人數のことにしあれど、各ゝ適宜に分宿せり。予は、同伴七名と共に、濱邊なる漁家に投せしが、家の構造は、左までに惡しからねど、四邊の極めて不潔なるが上にも、かてゝ加へて、疊もなく、唯、粗末なる薄椽のみなりしを、爐に炭なくて生乾の麁朶を焚きたるとには、いと困却せり。さるにても、一同は空腹となりたれど、そを醫せんがため、主人に請ふて、佛前に供へありし最と大やかなる稗餅を食しけるが、そのまづきこと言はんかたなし、予は辛うじて一個を食ひ畢はんぬ。そがうちに雨は全く霽れて、夕日までゆくてり渡れり。この上にて、風さへ收まりなど、汽船は今宵にても出帆すべけれど、せめては、此の島にて、往昔より有名なる、錯銜の觀音にても詣うでんとて、一同は、程近き觀音寺へ至りけるが、聞きしに劣る小刹にして、四邊は一圓草もて掩はれ、觀音と覺ぼしきものも見えざれど、一同は不審に堪へず、即、住職に就きて質したるに、固と此の寺は、靈巖寺（岩船村諸上寺の末寺なりといふ）と稱し相當の伽藍なりしが、今を去ること二十年前（明治二十四年を去ること）回錄の災に罹りて烏有に歸し、爾來再建も覺束なかりしを、有志者の盡力に依り、去ぬる明治十四年、漸く形ばかりにも再建の運びに至りしものなりとぞ。されど、此の時までも秘藏しありたる往古よりの重寶は、悉く燒け失せしも、錯銜の觀音のみは保存しあれど、イザ開帳しまゐらせんとて、一同を此の寺の右なる觀音堂へ誘ひぬ。つきて見るに、觀音は、丈大約四尺餘りもあるべく、蓮華臺の上に直立し、左の肩に錯痕を存せり。地質は栴檀木の由なれども、

いと古びて、處々虫の穴あるを見受けたり。今、其の由來なりとて住職の語るを聞くに、今を去ること千年以前、此の島に程近き海に、夜な〱光りものありとて、島人は恐怖の餘り漁をも爲さでありけるを、折節一人の老人ありて、已は最早年老いて、世に用なきものなれど生命は惜しからじ、イデ島人の爲め、其の光り物を見屆け來んと、健氣にも、或る夜、獨り舟漕ぎ行きて、其の光り物を、大やかなる簎もて衝き揚げ見れど、何ぞ料らん、是なん一体の觀音像にてありけれど、驚くこと一方ならず、たゞちに奉じ歸り、取り敢へず堂宇を新築して納めたりといふ、是、即、此の觀音にして、簎衝の名亦こゝに起因せしものなりとぞ。日暮住持に謝して歸宿したり。

やがて一同は、配膳のまに〱、村醪を酌んで獻酬を初めたり。魚は極めて新鮮にして、鮑、章魚、の如きは、頗る好下物なりしに、引かへて、飯の非常に粗末なりしには、一同困却せり。聞く處によれど、島人等は、平生皆麥飯を用ゐ、普通の米は、内地より供給を仰ぐが故に、是等の飯にても、他より來れる珍客にあらざれど供せざるものなりといふ。予は食を終へて後、二三人と、去つて白砂の上を徘徊せしが、頃しも陰暦十六夜の事なれど、月は既に地平線を離れて、隈なく滿天に冴え渡り、幾双の海鷗が我物顔に翼を張り、雲を拂つて天半に回翔る樣は、畫くもなほ及びがたしとや謂ふべく、閃々たる金波銀波は、幾里ともなく、眼の及はざるまで照りわたり、湯本、津輕の模糊として、僅かに天末に漂ふ風景は、ゑも言はぬ眺めなり。ぞが内に、夜もいたく更けたれど、愛を割いて歸宿したり。(以下次號)

奇習

西海坊

おのれは不知火の筑紫國まかゞやく玉名の里にすむ賤の男、識なく學なきもの、過にし頃より學の業をいそしまむ爲、神風の伊勢國、百傳ふ度會の里に住むこととなりぬ。されど廿年余年間、おなじ習慣風俗の内に育てられしおのれは、頻に異りたるものに從はさるべからざるにいたりぬ。今まで普通の事とおもひしものも、所謂所風俗國風俗とやら、他國人の眼にはあやしく見ゆるものぞかし。されど、己は、今他國人となりて、おのが生れし故郷の風俗習慣を達觀し、殊に著しく異なるものを取りいでゝ、女鑑の一隅をかり、讀者諸君に紹介せむとす。諺に、

難波の葦は伊勢の濱荻

奇習なれもとて、强ちに勿咎、まはらぬ筆の罪もいと多かるを、あはれ。

その一

はしがき(箸削)

日月は百代の過客とやら、春過き、夏行き、秋去りて、冬も早や暮れむとし、太陽は常のやうに滿天をてらせど、下界には、一種の妖雲たなびきて、何となう騷がしう、債者と橘とは赤う、負債者と松のみますます靑うなりて、貧富のけぢめはたしかに一目〱瞭然たり。

赤鬼靑鬼の、足を宙に飛ばせて、西東に奔走する極月の中ら十三日は、實に百難を忘れて樂む日なり。商家、及山里遠き家々には、二三日前より、賣歩ける栗の素立と、樫とを買取り、この日にこれを程よく箸に削りて、正月中の箸となす、栗なるは栗箸といひ、樫にに作れるは樫箸、或は白箸ともいふ。又

太黒箸とて、樫の大きなるを三角形及多方形に割きて、これをあまた集めて一束とす、その大さ周一尺四五寸以上なるべし。これを三角形に束ねて、神棚にかざり、來年の豐作を祝ひ、あるひは商買のます〳〵繁昌せむことを祈る。又山里近きもの、あるひは農家にては、子供家僮などに命じて、野山に行きて取らしむるを常とす。さてその夜は肴となますなど拵らへ、盛に祝ふ。されど、今日よりは正月の中なりなどいひて、子供を樂ましむる位なり。又この日に祝の出來さるものは、二十三日にするを通例とすされど、こは古の例にて、今は次第にこの風習もうすらぎて、青書生などの跋扈する家にては、天保老翁の言聽くべからすなどいひて、古例を癈するも多かり、いと便なし、「禮之用者和爲貴」泥みてはその甲斐もなけれど、強ちに癈するはいとにくし。

扨、何故に、正月に限りてことに、栗、樫を用ゐるやといふに、その起原理由はわからねど、緣起家のことによれど、正月は一年中の月の初にて、ことに緣起をたふとぶ月なり「賢う（樫）繰り（栗）まはす」と、いひて、金銀の支出收入、米穀の收獲等、すべてその宜しきを得むことを祝ふものなりといふ。又柳箸とて、柳の素立は箸に至極適當なれど、「賢う（樫）やり（柳）またす」と、いひて、これを忌むもの多し

（以下次號）

朧月夜

濱荻

見上ぐる許の高殿には、華の如き火影きら〳〵と、障子にまどゆく、彼方此方、行き通ひ立ちさまよふらむ影法師はさすかに上の品と見ゆるに、手は蜘蛛

手に、足は千鳥に、しどろもどろとされはみたるは、かたはらいたく、糸竹の調さへ今は亂れに亂れたり。をりしも、どよめき渡るもろ聲は何。こは是〇〇將軍萬歳とうちかへし〳〵呼ふなりけり。朧月夜の影踏みしめて、歸りを急ぐ吾か身、いつこに心引れたりけむ。とはかりうちまもり居たりしが、さては某殿の祝の筵よと、思ひ浮ぶふしも有りけれど、さまではとて、吾から事もなけに打消して、又も歩み出てぬ。

宵の程は、らうかはしかりし都大路も更け行くまゝに、やう〳〵うち靜まりゆきて、さう〳〵しくもなりぬる哉。眼鏡橋越ゑて神田に入り。淡路町たどりくれは、四辻の小暗きかけより「車めし玉へ。車召し玉へ。」と呼ふ。五番町まて若干ぞ。」と問へど「十錢賜はりね。」と云ふ。「よし。いと安きことゝてのれど、やがて挽き出でたり。

吾は人より背丈高く、足のはこびも早き方なれど、なま〳〵なる車などは却りて心ゆかねど、大方は雇ひし事もなく、心やすさの膝栗毛に鞭うちて、「千里もなしかは。」と息巻くを、今宵は更けたれはなりけり。

されど、思ふことはづるゝ世にて、此の車いとたど〳〵しうて、あやにくなりしそかし。さるからに、例の心いられせられて「急げ。急げ。」と勵ませど、しどしてそわれ。又たゆみゆく。もどかしとも、もどかし。此の車いと古きにやあらむ。常にゆら〳〵とうちゆらめきて、輪の響いみじう、ともすれどうちくつかへらむとする折々もあり。昔清原のおもとが、きしめく車を惜きものゝうちにかずまへられけんことさへふと思ひ出されて、をかしう、獨ゑみせ

らるゝも果は亦憎くさのくさはひなりけり。
「値も増さんに。今一息急げ。」と此の度はそゝのかすやうに云へど唯いらふるのみにて、息づかひ荒々しううちあへぐさま、肩のほとりにも見ゆるに、且はいとほしと思ひなりて、路は中らなれど、今はとて強ひてれろさす。」今宵の月のをほ／＼しさに、心にも留まらざりしが、幾度もぬかづきてうちわふる様面は手拭もて包みたれど、今ぞあやしく目とまる。興へし代改めむとにや。彼が轅にかけたる提燈に、顔さしよせたるを能く見れど、あはれ／＼思ひの外にも、彼は女にて有りけり。あゝ彼は女にて有りけりな。」

◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦

早うかくと知らましかば、さまでは責めざらましをど、今更のやうにいとほしさのみ増れは、つれなくも立ち去り難うて、いねざる家もとあたり見渡す。夜ふけたれど如何はせむ。やがて吾も其處にうちかゝりて「など斯うは辛きわさをする、つばらに身の上談り聽せよ」など、ねむころに云ふ。されど、いらへは無くて、まみのわたりれしのこふは、早や涙の先だつなるへし。やう／＼「今夜かりそめに召し玉ひけむ君。ひきさまの御心にそはざりしだにあるを、まいてはかなきことをきこえ上けむは、なめけなれど御心の深さに」と、云ふもれろ／＼なり。
「あはれ聞しめせ。妾の家は、八重葎はふらむ伏屋の賤しきなりはひはするものから、人一人ありて、笑ひもし笑はれもして、よろに知られぬ楽しき月日を送りき。されど、其も時のまの夢にて、一年の夏、支那とのたゝかひ、端なく起りて、夫は俄の召にあひぬ。同じなりはひの人々は、かくときくより、取

る物もとりあへで、出で入り慰ひあへり。夜一夜、賤の男は賤の男どちにて、誰も彼も、所せきまで膝うち頽し、酒のみ物食ひつゝ、とかくのゝしる。夫は妾の心をも知り玉はぬにや。いとのどかに打ちかたらひて、をり〳〵笑ひなどして、晴れぬ思をけしきにも見せ玉はず。さなきだに、短か夜の別惜まむ一言もえいはぬまに、心の闇を殘して夜はほの〴〵と明けにけり。後の事ども何くれと、隈なく云ひ殘さるゝにつけて、吾ながらなどから臆せしにか、胸つとふたがりて、うち出でむ言の葉も出ですなむ。夫は勇ましげに軍立ちし玉ひぬ。妾は涙をもて見送りつ。あゝ思へむ之ぞこの」と云さしてむせかへる。

「支那に渡り玉ひてのちは、月に二度三度の音信を、こよなき力草にし、日頃はさのみ手に取らざりし新聞をも、こゝ彼處より借りえて、拾ひ讀みゑし、人の軍物語にも耳そばだてゝ、只其のすぢをのみ知らまほしうなむ思ひにし。秋は立ちぬ。此の程よりぞ妾はけしきつぎて、人知れず戀しき人の種を宿しけるよとさとりぬ。戰も止みぬ。うれしや。夫はいつ歸りますらむと、心まちに待ち設けつるものを。何事ぞ。又更に臺灣とか云ふ國に向はせ玉はんとは。臺灣とは世にも怖しき人食ふ人の住みかなりけり。

かく云ひて、女さめ〴〵と泣くに、心もとなくて「さて後は」とあながちに問へば、息の下にて「命知らぬつはもの共と、物見に立ちてあさましや、島の荒男に殺され玉ひき」と云ふ。胸うたれて物も覺えず。慰めむ言の葉も知らで、しばしはあきれにあきれてゐたりしが「そはいみじき

事。さて嘆きつらむ。心の程、思ひやられて己だにうち泣かるを。されど、今はせんなし。さて其の人のかたみは」と問へど「それも泣き枯らしたる身の瘠せさらぼひたる餘にや。生るゝやがてみまかりぬ。」と聲もをしまず泣き沈む。

死にし子顔よりかゝりきとは世の常の親心なるを、之はまして無き人の忘れ形見。如何に愁しかりけむとれもひやらる。

やう／＼心靜めて、又語るやう「杖とも柱とも賴めりし人の、はかなく此の世を去り玉ひてしよりは、朝夕の煙さへ立て難う、家はいよ／＼貧しうなりにたり。親兄弟は、身の行く末を思ひやり玉ひて『更に夫を持て、人にとつけ』と勸め玉ひ、夫の友などにて、なさけ／＼しうする人あるに、心ゆるせど、果は耳けがれなること云ひ寄るなど、憂きことのみまさる世の中。去年の冬夫の母刀自にて、田舍わたりより上りこし人の、御年の積にや。はた御力落しにや。此の頃病み臥し玉へるに、晝はひねもす御膝近う仕へまつり、夜は藥のしろにとて、夫の手馴し手車を、かくは挽くなりけり。」

家路忘れて聞きとりたる吾は、涙とゞめあへぬまゝ、つと立ちてうちそむけど、月は早や西に落ちて有りしより、けに曇り顔なるも又なく哀なり。

かくてのみやみなむや。神は正直の頭に宿るとか。心長う時世を待つこそ宜けれ。こは露ばかりながら、己が心のしるしなれど、母なる人の好き玉はむもの買ひて與へよ。」とて、多くも有らねど財布うちはたいきて取らす。女「取らじ。」とていみじうすまひたれど、遂にまけにけむ。あまた度いや云ひて去りぬ。吾は九段坂をのぼりて、遙にこし方振りさけ見れど、

女も見かへりがちに挽き行くめり。おのが目には火の車とも見えて。

此處は靖國神社の廣前なり。木の間をもるゝ御燈の、影をちこちにきらめきて、無き人の魂の浮れ出でたらむかと疑はるゝも心すごしや。

折しもあれ。鳥居のもとに、黒き人影立ち顯はれて「一將功成りて萬骨枯る。」と、恨むが如く訴ふるが如くうち誦んじたる、之や世に云ふ悲歌慷慨の人なら し。

いつこより風のつたへくらむ。三絃の聲いとしめやかに聞ゆるもいみしうつきなしかし。

吾は高殿のことさへ取り集められて心苦しさ云はむ方なく、髮立ち骨鳴りて、六尺の身をもて涙はら〳〵とひた落しにおとす。月の見るらむことも恥しなとは世の常にて。

東京廿四景

蓬生屋女史

玉川

武州第一の勝槩と稱せらるゝ玉川、源を武甲の堺なる丹波山に發し、多摩郡の丹波村に添ひて流るゝより多摩川と云ひしを、後世、玉川につくりて、山城攝津、紀伊、近江、陸奥等にある玉川と共に合せて六つ玉川と呼びなせり。

げにつらぬきとめぬ玉川の里の名に負ひて、浪のしら玉うるはしく、ぬば玉の夜も光る玉と見ゆるに、わたりの砂も眞玉の如く、賤の女がさらす調布にも玉をよせて、よろづをかしきに、西北に秩父根をはじめとして、高尾、長尾、大山等のもろ〳〵の山をのぞみ、東南は、堤斜につらなり、卯の花の浪にまがふもすゝし。日野津より以西は水石のめづらしき



もの多く、以東は平地なれど、往々觀を改めて勝景少からず、その清き流れには鮎多く生じて、いと名高く、夏のはじめつ方より、秋のくれまで、所の漁人は云ふも更にて、遠き都の人も遊獵するもの夜までも絶えず、篝火の火かげに、いとゞ玉川の玉の光りかがやきそへて、うるはしくも、にぎはしく、殊に、月にも雪にも、いとすみ亘る里なり。（畢）

朴平（廿二）

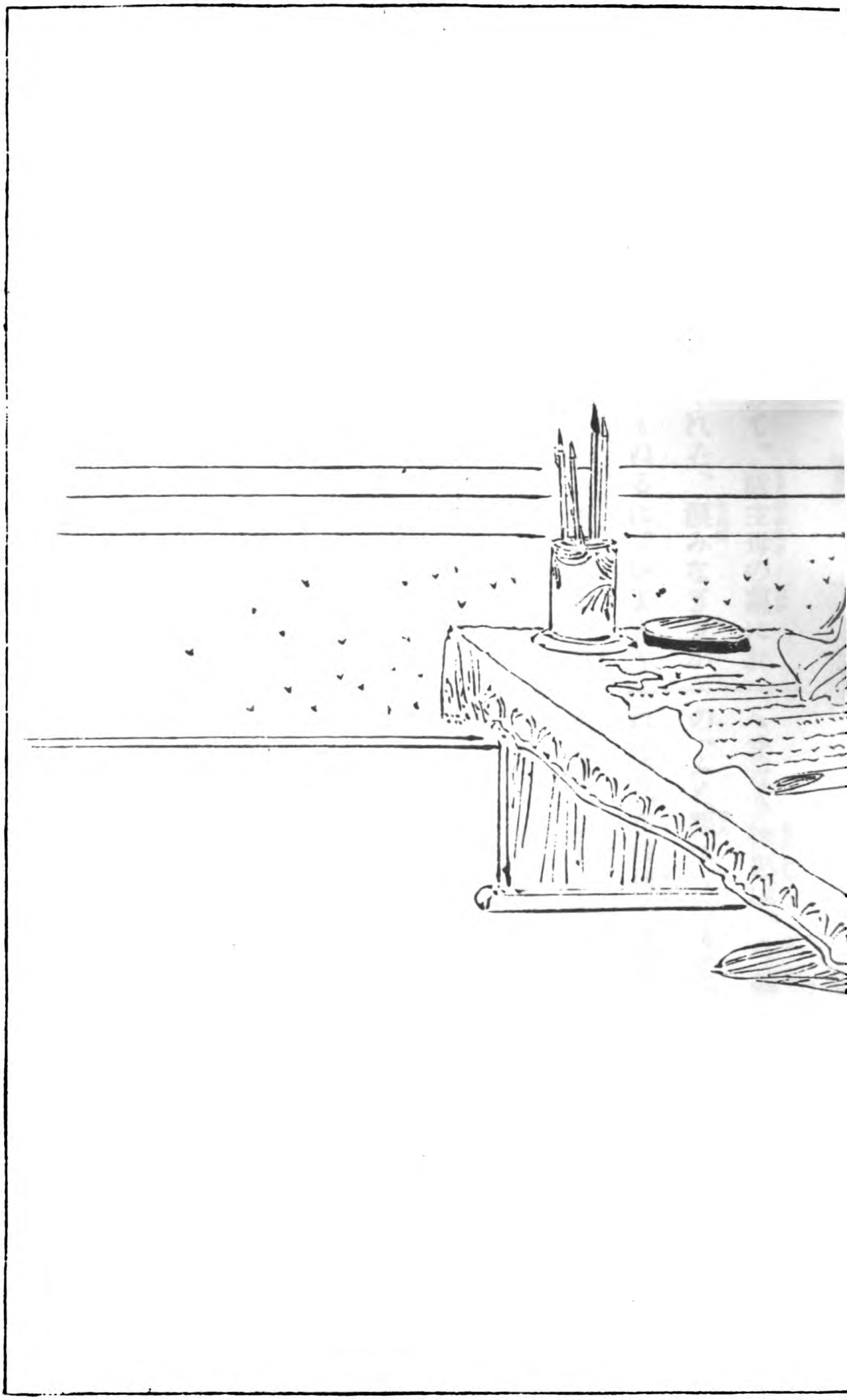
白魚女史

さて、朴平は、何處をあてとも分かねど、春野樣より外へはとおかりをたよりに、まづ、其方へとれとづるれど、相變らず下女のれつるのをかしげに迎ふるのみにて、志したる人はあらず、もしや何處へか忍ばせあるにやと心殘るを、せめて命と、再び、三

度、尋ねかへすに、そかしや、朴平殿、つるが、何とて、文雄樣を忍ぜせ參らすべき、つるが忍ぜせんは、さぎか、烏か、はぎか、わしの、わかきものならでは、さりとも、なほ疑はしくぞ、屋さがしなり、巣さがしなりなし玉へとて、彼方、此方のふすま、戸棚あけて見するに、もしやとの思ひもたゑて、朴平はせんすべもしらに立ちまぞふに、流石の下女も眞面目になりて、朴平が氣を引き起さんとてか、茶を汲み來りてすゝめなどし、さやうに心づかひなし玉ふな、若き折りは二度とはあらず、少しは御家を明けさせ玉ふやうの事あるも、なか〳〵に御身体のれためならんなど、慰めなだめんとすれど、朴平は心も心ならず、挨拶もそこ〳〵、春野方をも立ち出でゝ、またも迷ひゆく方は、向島梅屋、覺ゑたる軒提燈を見るより、案内も請はず、すか〳〵と座敷へとび入り、部屋〳〵伺へど、文雄も居らず、小千代も見ゑぬに、力も氣も失せて、そのまゝまろび伏せぞ、氣違翁がかけ上りし、〳〵と、さわぎたてたる猫、小猫、此さまを見るより、ろや、氣狂が作れし、氣絶せしと、わなゝきのゝしる人々を、朴平はきつとにらまへて、れのれ、猫ども、ようも〳〵、主君をたぶらかせしぞ、小千代は何處へ行きし、此處へ引き出せ、朴平が後の世の道づれにしてくれん。此處へつれこいとのゝしるに、人々は、いよ〳〵わなゝきてかへるのみなるに、埒あかねやつぶらよ、今度主君の來たるを歸さずぞ、小千代はれろか、誰も、彼も、とり殺すぞと、にらまへちらして、其家をも立ち出でぬ。

さても、文雄は何處へか行きたる。朴平は、今は足の迎けん方も覺ゑず、隅田の川浪、たのみも入りはてま





はしき思ひを、やう〳〵に引きて、故主母の墓におとづれ、さま〴〵に思ひつゞくれど、涙みなぎりかへりて、線香の煙りもうちしめりぬるに、いよ〳〵心細く、かなしく、しばらくは沈み入りけるが、我と心をはげまし立ちて、涙を拂ひ、なむ、佛、靈魂をそへさせ玉へと、うちねんずる聲もかきくもりて、涙はまたもたぎちれちぬ。

百代も幾度か、絶えんと思ふ玉の緒を流石に、ちすぢのなげきにつながれまどふ、窓のほとりに、おとづるゝかりのたより。母よりとあるに、くるしきながら、また流石になつかしう、封きりて、よみ行くに、いつしか厂がねの聲とともに、おとづれたえたる此頃の空、もしやわづらうてはおらすや、其方が日來の心、故郷へのたより、たゞに忘るゝものとは覺えず、何は、ともかく、此母は、心にかゝりて、晝も、夜も、忘るゝまなき物思ひ、今朝方も、そちが、やつれたるさまの、ふと夢にうつりて、かなしく、泣きておどろかされても、なほ何となう心にかゝりて、げに今も面影にたちて、え堪へぬ思ひになん。つきては次郎を早くあづまへつれだちてと思ひまうけ、父君に語らひしに、之ればかりは辭み玉はで、早速の御承知られしう、すぐにも飛び行かまほしきなれど、都合もあれど、今一月ばかりありて、都へ上られんに必ず心強うまちてや、百代、必ず夢にたちしやうのやつれたる面影を見せてなくれそ返す〳〵心強く壯健にて居てくれよ、万づは、まのあたりに語り聞えてんとしたゝめあるに百代はわつとばかりに泣き沈みぬる折りから立ちかへりたる朴平、たゞさへ泣きたき心、見るから共にむせびしが、こは、孃樣、何をなげかせ玉ふ。今日はボートレースならんとて、御墓所より、まはり見

んとせしに、をかしや、影も形も見えず、狐にでもたむかられたる心地して、春野様へ立ちより尋ね見しに老いの耳のにぶさは、湯治に行かるゝと、競漕へ行かるゝとの聞きたがへなりきと、またもこし

ゆる朴平の心は如何にくるしからん。百代は涙せきかねて、よゝとなく。朴平も、むせびながら、思はず國元よりの手紙ひろひ上げ、よみ終りて、これまた泣き入りぬ。



文林

夏月　徳大寺實則

手にならす扇のかぜもゆふづきの
かげさすまゝに忘られにけり

林新樹　長谷信篤

雨はれしかた山はやしつゆちりて
みつ枝をわたる風ぞすゝしき

梅雨近　高崎正風

五月雨のふりいてん日も近からし
昨日もけふもそらのくもれる

夜卯花　交野時萬

やみの夜もしづが垣根のうの花の
光にみちをまどはざりけり

山新樹　池田茂政

あらし山花はいつしかちりはてゝ
木々の梢のわかばさすらん

庭卯花　前田利聲

卯花のさけるかきねを志ろ妙の
ころもほすかとあやしまれ鳧

竹間燈　本多忠貫

住人をたれとしらねどゆかしきは
竹のはがくれみゆるともし火

大原女　宮地巌夫

つまどりてつま木戴きゆくさまの
いとおもしろく見ゆる大原女

夕卯花　北郷久政

人顔は見ゑぬはかりにくれたれど
かけさやかなるさとの卯花

市中梅雨　阪正臣

さみたれの降暮す日もうちひさす
都のいちはにぎはひにけり

夕水鶏　内藤存守

千町田のさなへ吹こすゆふかせに
くひなの聲もたくひ來にけり

岸上藤　遠山英一

川ぎしのまつにあまりて藤かつら
はしのうへまてはひ渡りけり

首夏　諏訪忠元

かけろめし軒端の鈴にれとづれて
風でゝちよきなつはきにけり

樵路卯花　仝

柴人のあとをとめつゝきてみれば
谷のこかげに卯つ木花さく

孤兒院　小出粲

山吹のそのみなしこ子もなゝ重八重
はなさくはるにあひにける哉

山新樹　仝

うき立し花のなごりもわすられて
やましづかなるわかみどり哉

燭影映水　岡山高蔭

木がくれていへはみえねど燈火の
かげいけみづにうつりける哉

松　大畑弘國

かはり行くひとの心にくらぶれど
うつろふ色のみえぬまつかな

黒崎兼八の新婚を祝ひて　仝

黒崎のまつのこかげにならびゐて
千代よびかはす鶴のめでたさ

浦賀のあたりに物しける時　三浦千春

田をまへに山をうしろの垣つくり
すみても見まくほしき家かな

將校とおぼしき人の馬にのりてゆくかた　仝

つるき太刀身にとりはきてあらひやの
馬にまたかりゆくはたが子ぞ

雨中新樹　三輪義方

雨にこそとふべかりけれしめやかに
水枝しげれるこかくれのやど

をりにふれて　足立正枝

日の本にうまれしのみも嬉しきを
かゝる御世にもあひにける哉

海邊霞　渡邊光鳳

松風もあらいそなみもけさなぎて
かすみにしつむ沖の浮島

夕落花　仝

駒とめてかへりみすれはあらし山
ゆふやまかせに花ぞちりくる

宮簀姫　佐々豊水

御劔のひかりとともにくもらぬは
君がみさをのかがみなりけり

梅　野崎宗英

山ふかみ春ともしらぬしづの戸に
うめは今朝こそ匂ひそめたれ

山吹　仝

誰がめでゝ片枝をれると山ぶきに
とへど答へず口なしにして

名所卯花　酒井喜雄

をはつせのかはぞひうつぎ白浪に
にほひあひてもみゆる頃かな

庭新樹　草野隆道

昨日まてみたれし糸とをもひつる
にはのやなぎも若葉茂りぬ

卯花　仝

よのうきを何にしらなんうの花の
月にはくもゝかゝらざりけり

春夢　菊池眞澄

うめが枝を鶯なから手折りぬと
見しはかりねの夢にそ有ける

四條畷懷古　仝

矢さけひの昔をもはゆ飯盛山
をろす畷のよるのあらしに

發句の題によりて月と梅を

宇井正夫

うつさはやさし入る月の清き夜に
花のかげそふまどのうめか香

富士　仝

うごきなきみよの姿のあらはれて
雲井にたかきふじのかみやま

閑居夢　澤田德平

山深くのかれすむ身のこゝろにも
あらぬうき世の夢をみるかな

窓燈　仝

うち向ふまなびの窓のともし火は
こゝろの闇もてらすなりけり

伊豆地方旅行のをり　安齋篤敬

つれ〳〵をうちわすれけり春の旅
しらぬ野山をめぐり〳〵て

汽車にて　仝

まかね路をはしる車のたのしさは
ひらけ行く世の惠みなるらん

寫眞　龜谷行

みよしのゝ吉野の山のうつしゑは
花のさかりをとはに見るかな

山家夏　仝

世の中のあつさを知らぬ吾か庵は
木の間の月もあひやどりせり

餘花何在　木庭芳香

木がくれに花や殘るとなつやまの
しげる若葉をわけてたづねむ

紫式部の石山寺に源語をつくるかた　仝

石山にこゝろとすめるつきかげは

ふみの林のかゝみなるらん

尋郭公　近衛貞子

歸りつるあとにて鳴はいかなかり
くやしからまし山ほとゝぎす

湊川懷古　鍋島榮子

ながれての後ぞいよ〳〵みなと川
高きその名そしのばれにける

夜待郭公　柳原愛子

ほとゝぎす初音まつとて霄やみの
月なきそらもうちまもりつゝ

谷新樹　松平健子

鶯のこゑきこゆなりなつのきて
あを葉をくゞらきたにのした道

久待郭公　小池道子

ほとゝぎすまつとせしまに夏山の

若葉のいろもれいにけるかな

郭公遍　北島以登子

郭公いづこともなけどこのさとは
ことにも聲のしげくきこゆる

小學校　税所敦子

うなゐ子もふみの林にわけいりて
かつらのえだをのぞみよ哉

田上螢　保科節子

ふたつみつ螢のかげもかすそひて
田面にあめのはれ間をぞしる

連夜聞郭公　伊達泰子

人とはぬしづが軒ばにうれしくも
よことれとなふ山ほとゝぎす

幽閑郭公　原田蒼生子

きゝつとはいひ難き迄ほのかにて

待しかひなきほとゝぎすかな

老聞郭公　小川直子

かこたれし老の寝ざめも此ごろは
慰められつやまほとゝぎす

首夏鶯　遠山いね子

葉になりしのちもきてなく鶯は
なれにし花やわすれかねらん

納涼風　仝

燈火はきえたるまゝにはしゐして
月まつほどのかぜのすゞしさ

郭公　鶴久子

ほとゝぎすなかぬ年かと思ひしに
きゝつとかたる人もありけり

閨夏月　中島歌子

ともし火をけちたる虫もにくからず
涼しきつきをねやにみるよは

殘鶯　田邊和氣子

待つけて聞ゐしよりもあはれなり
はなよりのちのうぐひすの聲

新樹　仝

大井川みつもみどりになかれけり
あらしの山のわかばさすころ

晴天鶴　諏訪晴子

朝日影かゞやくそらにまふたづの
千代よぶ聲ぞいとゞさやけき

硯　師岡須賀子

朝な夕なすゞりのうみはあさけれども
ひろひがたしや底のしら玉

山家夏　龜谷はつ子

よのうさを吹きはらひたる松風に

あつさもしらでくらす山ざと

蝸牛　清水たけ子

文まなぶ窓のもとなるくれたけに
いへゐをうつすかたつむり哉

蛙　清水静子

つくだねのみねの櫻もちりはてゝ
雫の田ゐにかはずなくなり

栽花　清水きく子

うつし植ゑし若木の櫻去年よりも
またひとしほの色ぞ見えける

高麗地の飼猫の名玉といふ迷子となり
しを詠める悲歌幷短歌

橘正雅

かず〳〵の　城にもかへぬ　名にしおふ　玉てふたまは　現身の　み毛の艶さへ　おほかたの　こまにはあらで　類ひなく　毛並勝れて　夜ひかる　めぐしうつくし　人としも　生れ來なくに　玉だねの　をすのうちなる　手飼とも　今かならんと　おくつゆの　結びもおかで　夏やせて　見れぞむなきに　數の子の　おやにあかせて　おまたゝび　のどかきなでゝ　山菅の　ねもころ〳〵に　いろり邊に　なか〳〵ねせて　いとし子の　めでつゝありしを　昨日かも　いかなる人か　あしかにの　横しま風に　ゆくりなく　さそひ行かれて　おもかげも　見えずなりぬと　聞くわれも　胸ふたがりぬ　いづこにか　迷子となりて　今日はしも　家を戀しみ　物もいひ　文字をも知らは　やどにこそ　とくもしら

せめ　父が名も　とくとかたらむ　母にしも
文て告げむ　此の玉は　むつきの中に
椎の實の　しひて請ひねて　懐に　いだきて
なれど　小車の　れどに驚き　わが肩に
のぼりあがりし　爪跡の　今も殘りて　其の
時の　いはけなかりし　形さへ　思ひ出られ
て　もる住家　虫ならなくに　はれのらし
數多く招けど　ろの甲斐も　なみだ灑ちて
終夜　まどろみかねつ　身まかりし　人さへ
世には　蘇生る　ためしもあれど　歸りこむ
時もあらなむ　こを思ひて　こゝろなくさ
め　夢ならで　不明●とむかり　頼まれぬ
事もたのみて　浮雲の　よろの高麗とは　れ
もはれぬかな　短歌

先祖ははてもしらぎのこまときく
　はるけき道もかへらざるべき
秋ふけて夜寒となれど誰か手にか
　そひ寐の床にねうとなくらむ
たきもいゝ箱なす汝か背かきなでし
　袖のうつり香なほうせぬかな
ほろくなりふとくなりぬる汝か眼の
　淋しくかはるやとのうちかな

水津千雲

こは、已れが去にしと學びつる、英國七大家文集の中なる、カムベル氏の作なり。いとおもしろくものせられたれど、未だよみたまはぬ孃たちにとて、女鑑の清き面をけがすになむ。

アリン卿の貴孃

やよ舟人よとくこぎて　ゆめおくるゝなふな人よ
かなたにつかむ白銀の　代をあたへむかずあまた
嵐はげしき闇の夜に　ロックガイルの湖越えて
いかなる人にましませむ　いかなる里にものすらん
きけむ男はいらへけり　こなたは音にも聞つらむ
アリンの郷の媛君と　われはアルヴァの島守よ
吾等は島を立ち出て　父の追手におはれつゝ
三日といふ日は過ぬれぞ　もしも追手に逢ひもせむ
われは淋しき谷ぞこの　草を血しほに染めぬべし
騎馬の追手のはやくして　あどをとめなむ何とせん
ひめが戀人谷底の　露ときえなむ何とせん
なに慰まん花嫁は　たれ慰めむ花よめを
心きなく居たまへよ　われはわたさん恙なく
銀の光のそれよりも　みやびやかなる媛君の
涙を見るがつらければ　銀にはかへじひめ君の

はるゝごとき笑顔には　空はひときはくもりゆき
嵐はいとゞあらくして　水のこゝろも怒りつゝ
外に見るだにおそろしく　かたみに面は色うせて
語ろふ聲も力なし」　風はますます はげしくて
波はいよいよおそろしく　身をも冑にかためたる
追手の人々谷を下り　策うつ駒の足音も
闇にも近く聞ゆなり　はやとくとくと舟人を
いそがす媛の聲さへも　いきまくごとく聞えつゝ
またいひけらくわが父の　怒れる面にあはせては
荒なみ吾等が身を捲きて　天の怒りはうくとても
はるかに安しと思ふなり　舟はやうやうおそろしき
陸をはるかにいでぬれぞ　あゝいかにせんまた更に
波風あらき潮水あり　人の力におよばざる
濤風荒らくひめの身は　いかれる波にとりまかれ
あわや悲しくならんとす　逆まく波にさそはれて

はげしき風をおかしつゝ　かへらぬ澪に漕ぎ出ぬ
及ばぬ岸に父はきて　怒れるさまもたちまちに
悲しきさまとなりにけり　こはそもいかにと泣父の
聲にはやくもこもりにき　媛の不幸をかねてより
さどりしさまの現はれて　千代を契りしわが夫に
はなれしものと抱きつゝ　風と波との間より
ゆきを欺く愛らしき　かた手を伸べて水の上に
救ひをもとむる悲しさを　父は見れどもかひもなし
父は叫べりかへれ〳〵　後へにこげよ波こえて
波よりたかき罪とがも　いかでとがめむ吾ひめよ
あゝあさましの吾媛と　聲をかぎりに叫びけり
さけびは絶えず響けども　波風いよゝはげしくて
歸へらむすべもなかり鳬　救はむすべもなかりけり
すさめる水はみやびなる　乙女をまきて海の底
父もかへらぬあとおひて　涙の淵に沈みけり―

首夏の曙

永石德文

まどの外のひともと櫻ときをえて
心ありげに匂ふけふかな

と見し花も、いつしか青葉とかはりぬ。世のわたらひにたづさはりかゝづらふとにはあらで、こもりがちなる身は、ふぢよつゝじよと、人づてにのみゆかしときゝて、たゞいたづらなる空に心をぞかよはする。あやめも今日やよけん、庭には橘こそなけれ、ほとゝぎすの初音もがななど、思ひくらしてねたる夜半のほど、一聲なのるよそきゝて、一聲は耳にのこれりてほとゝぎす」と、口すさむ聲に、我とわれにかへれど、こは思ひねのはかなき夢なりけりな。板戸のひまよりひかりあかくさし入たるは、明けぬるにやとおどろきて引きはなてど、まだ深き夜の月なりけり、「ひとこゑにあくるときけど」と

いひけんもおぼえていはん方なし。この夢うつゝならましかば、と思ふもかぎりなき心なりや。月の光もけはひかはりて、若葉にてりあひたるさま、心地いひしらず。あたりいと靜けく、心さへすが／＼しくて、打ちみやるほどに、この月のかげはまだ若葉の梢にかゝりながら、東の空はほの／＼とあかりわたりたるほど、更にをかし。青葉におきあまれる露の風もなくてはら／＼とこぼるゝ、はたゝとふべきものもなし。

わか葉よりこぼるゝ露の下しづく
すゞしきものゝさきがけにして

地久節

安元耳納

かけまくも綾にかしこき、大后の宮のあれましし。けふの足日ぞたふときはみなりける。あさまだき久方の雲井を見れば、葦田鶴の一むれ二むれ飛びかひ。水底清き池づら見やれば、かめの子の三つ四つ二つ浮び出でたる。おのも／＼己がよはひを、あきつ御神にさゝげ來ると、祝ふ心ぞしらるゝ。かめこそは萬代ふと云へ。たづこそは千代ふと聞け、千代は限りあり、萬代も限りあり、よろづ代に千代をそへてもなほ限りありける。されど天地のよりあひのきはみ、とこしへに動きなく、かぎりなきは、かけまくもたふとき天つ日嗣の御位になん。その天皇の後へのまつりごとをしろしめす、大后の宮の御齡も、さゞれ石の巖はとなりて、苔のむすまで、常しなへにおはしますべしと、祝ひまつれば、けふの生日の足日は、あなたふと、あなめでたしや。

草

田邊和氣子

なへての事おのづからなるこそよけれ、おのが家なるほどもなきせんざいを、草にまかせて置つるに、よもぎふは軒よりたかく、あさぢふは結ぶばかりになりにけり、露きら〳〵とおきわたし、暮ゆけば、月の光りを待とるさまなど、哀れにいひしらずをかし、草も時ありてしげり時をえて花さくものなるをいたづらにかりすてるは、いかにこゝろなしとやかこつらむ、されどしげるまゝにして露にまかせ虫のやどりとしたらむころ中々に見どころありて、かつは天地のことわりにもかなふならめ、とれもふも例のひが心ならむかし。



雜報

●陛下御手植の楓樹　陛下が御滯在おはします京都御所の御庭には、御池の水清かなる邊に、先帝御遺愛の楓ありと漏れ承るが、此程　陛下　この御庭をそゞろありきの折、此の楓の下に御足を止めさせ給ひて、暫し昔を偲ばるゝ御けしきに拜し奉りしがやがて。御手づから。樹の下に芽生への楓の苗を拔き取らせ給ひて、侍從を召して御鉢を取寄せ給ひ、御鉢植と遊ばされ、御池の岩鼻に据ゑて賞で給へり

とぞ。御徳草木に及ぶ。ありがたき御世にこそ。

●地久節　去し五月廿八日は、畏くも　皇后陛下の御誕辰日に當らせ給へり。例にあれど、宮中に於て御祝ひの御式を行はせらるべき筈なるに、今年は京都行啓中なるにより、すべて御式もはぶかせられたる由に承る。なほ、此日、府下の各女學校は、何れも臨時休業して、奉祝の意を表し奉りたり。

●立のぼる烟　此の程　皇后陛下には、女官どもを召して、京都御所の御庭を逍遙遊ばされて、遠近の景色などみそなはし、京都の繪圖をも取り出させ給ひ、此處は何、彼處は何など、御下問あらせられ、心長閑に御遊覧のをりから、御庭の東南の方より、黒烟立ちのぼりて、御眺めの眼さへ遮りたれど、女官達、何れもむさき心地して、眉打ひそめけれど、陛下は畏くもほゝゑませ給ひて、あれこそ西陣織物會社の煙突より出づる烟なれ、十年の昔、そが工場開業の折、親ら行きて見たる事あり、今かく賑しう烟の立つは、工場の繁昌するしるしにて、御國の爲にも嬉しき限りならずやと。御物語あらせられしとぞ。傳へ奉るだにかしこし。

●羅城門の遺趾　此程　陛下には、侍從職に向はせ給ひ、桓武天皇平安大内裏の總門たりし羅城門の遺趾につき御下問あらせられ、侍從武官歩兵大尉渡邊湊氏、御内意を承はり、去る十九日教王護國寺に出張し、參考となるべき古器物を寳藏より取出させ一覧したるが、其品は羅城門古瓦、釘隠し古金物繪圖等にて、圖は尤も細密を極め、羅城門は恰かも東寺西寺の中間に在る如く畫かれたり、依て同寺役員の先導にて、門の遺趾なる葛野郡七條村大字唐橋小字出在家と四ッ塚との中間、即ち今の千本通り道

路の西部に到りしに、此處よりは、先年門の柱礎を掘出したることある由にて、恰も西寺の舊趾と東寺との中間に當れり、同氏は尚西寺の舊趾をも踏査し、口碑をも取調べ、夫より一先東寺に引返し、昔、羅城門樓上に安置したりし傳敎大師作毘沙門を禮拜し、立歸りて見聞の儘を上奏したる由なり。因に記す、現在東寺の南大門内なる大金堂は、再建の度々羅城門の形狀を傳へしものなりとの事なり。

●英照皇太后の御分塔　今度、京都東福寺山内仲恭天皇御陵の北、後遍照金剛寺關白九條尙忠公御墓の東へ、英照皇太后の御遺髮分塔を建立せらるゝ由なるが、御塔石の形狀は、過般來大和の古塔を取調べ、甲乙二樣の雛形を調製し、九條公爵より畏き邊りの御意を伺ひて愈々決定となり、近日工事に着手せらるゝ筈にて、竣工の期は來る八月中なりと、御塔は四尺五寸四方の臺石を据ゑ、其上に十三重の塔を置きたるものにて、總べて奈良般若寺にある古塔を寫し、御塔の外構は御所風の筋塀とし、東西四間四尺四寸南北四間となし、前面に門扉を備ふる豫定なりとぞ。

●石山の螢獻納　江州石山は、螢に名高き處にて先年も、石山寺より宮内省に獻上せしことありしが、今年は京都に御駐輦あらせらるゝにより、夏夜の御慰みにもとて、同寺にては、目下獻上の準備をなし居るといふ。

●英國帝室及王族　英國女皇ビクトリヤ陛下には本年七十八歲の高齡に達し給ひ、即位六十年の御祝典は、來る六月二十二日より向ふ一週日間（二十八日迄）倫敦に於て擧行せられ、爲に我邦よりも大使を派遣せられし次第なるが、今回同陛下の御近親にし

て、現在帝室費中より御費用を受させらるゝ皇族は、左の如し、

皇太子　威耳斯親王殿下
エヂンバラ公　アルフレッド親王殿下
コンノート公殿下　クリスチャン内親王殿下
ロールス女侯　ルヰス内親王殿下
バッテンベルヒ、ヘンリー内親王殿下
メクレンブル、ヒストレリッツ大女公殿下
テツク内親王殿下　ケンブリッヂ公ヂヨヂ親王殿下
アルバニー女公ヘレナ内親王殿下

●野見宿禰墳墓の修理　兵庫縣揖保郡龍野町臺山といへる所に、　垂仁天皇の功臣野見宿禰の墳墓あるよしにて、此度土地の有志者相謀りて之を修理して祠を造り、碑を立て、永く舊蹟を保存せんことを發起し、頻りに奔走中なるが、社殿新築費は七萬圓、保存費、二萬圓の計畫にて、毛利公爵、前田侯爵、千家男爵等も大に此の擧を賛成せられ、熱心に盡力し居らるゝといふ。

●菅公用筆の修理　府下龜井戸天神社には、其昔酒井雅樂頭より奉納せし菅公の用筆五本を藏せる由なるが、何れも朱塗の軸にして、内二本はいたく破損し、三本は餘り損じ居らざるが、破損し居る二本こそ眞物にて、殘三本は寫しならんとの鑑定なる由、此筆に就て、先年本郷四丁目の筆師明樂齋が、華族酒井家の家扶に向ひ、筆の傳來を問ひ合はせしも、同家は彼の筆こそ正しく菅公の用筆にて、昔當家より天神社に納めたるには相違なけれど、由緒は多くの舊記を調べざれば判然せずとのことなりしかど、明樂齋はいと本意なく思ひて、兎に角天神社へ筆の修理を申出でたるに、神官も奇特の事に思ひ、早速承諾したるが、其内明樂齋は病氣に罹り、本意を遂

げずして死亡したり、依て妻友枝は夫の遺志を繼ぎ、自ら明樂齋と號し、書冩用筆修理を引受け、五本の筆を殘らず修理して同社に納めたりといふ。

●高等女學校開始　今度新に松江市に設けられたる島根縣の高等女學校は去る五月九日より授業を始め。山形縣西田川郡鶴岡町高等女學校は、五月一日より開設したり。

●女子大學設立披露會　といふを、去る月二十六日の夜、大坂ホテルにて開けり。來會者は、大隈、土方の兩大臣、近衛公爵以下五百余名に及び、さて、主會者内海忠勝氏は開會の趣旨を述べ、つぎて成瀬仁藏氏女子大學設立の必要といふことにつきて演説しその外大隈土方兩伯の演説もありたりといふ。

●尋常師範學校等教員豫備試驗國語科問題　この豫備試驗は、いにし四月廿六日より三十日まで執行せりき。さて、本試驗は、こん六月廿日よりなりときく。その豫備試驗國語科の問題なりしといふをきくに、

國語科豫備試驗問題

設問

（甲）

一、左の漢字に國訓を施せ

數　俵　鬼　艤　笈　及　椙　醉　鷄　懸
潮　欲　籤　氏　葛　屑　瓦　犯　竿　蝙
蝠　紫陽花

二、左の漢字に漢呉音を附しその用例を示せ

京　右　奴　行　留　圖　慧　皇　女　人
宗　男　武　定　明

三、助動詞を分類してその用例を示せ

四、本邦辭書沿革の一斑を述べよ

（乙）

五、左の人々の文學上の事蹟を問ふ

藤原俊成　石川雅望　村田春海
藤原公任　安藤爲章

六、左の書の記載事項と編著者の名とを擧げよ
奥の細道　花月草紙　新葉和歌集
古今著聞集　古今和歌六帖

七、連歌とは如何なるものぞ

八、元祿時代の文學の狀態を略叙せよ

（甲）（乙）の答案は別々に綴るべし

右三時間

解釋

一、五月ばかりに月もなくいとくらき夜女房やさふらひ給ふとこゑ〳〵していへばいで丶見よ例ならずいふは誰ぞと仰せらるれば出で丶こは誰ぞおぞおどろ〳〵しうきはやかなるはといふに物もいはでみすをもたげてそよろとさし入る丶はくれ竹の枝なりけりおい此君にこそといひたるを聞きていざやこれ殿上に行きて語らんとて中將新中將六位どもなどありけるはいぬ。

二、大かた延喜の帝つねに笑ひてぞおはしましけるその故はまめだちたる人には物いひにくしうちとけたるけしきにつきてなむ人は物いひよきされば大小の事きかむが爲なりとぞおほせごとありけるそれさる事なりけりにしきかはには物いひふれにくきものなりさてわれいかでふつきながら月にしにせじ相撲の節九日の節のとまらむがくちをしきにとおほせられけれど九月にうせ給ひて九日の節はそれよりとまりたるなり

三、よの中はいづれかさしてわがならんゆきとまるをぞやどとさだむる
士也母空應有萬代爾語續可名若不立之而

四、國母建禮門院を始め奉りて先帝の御乳母帥典侍大納言典侍已下の女房達船の艫舳に臥しまろび聲を調べて叫び給ふも夥しき軍喚にぞ似たりける……あはれなる哉花に喩へし十善の御粧無常の風に匂ひを失ひ悲しい哉月にかゞやきし萬乘の玉體蒼海の浪に影を沈み御座す事を無常元來定めなし有待誰かは恃み有るなれども清涼紫宸の玉臺をふりすて丶闘戰兵革の船中に行幸して未た十歳にだにも滿じ給はぬ御齡に忽に波の底に入り給ひけんあはれともいふも疎なり
（傍線の所のみを解釋せよ）

五、靱負の佐　公卿　回祿　攝籙　亭子院のみかど
けやけき奴かな　飾磨の褐のひたゝれ　弓矢の冥加　うるはしき事よりも艶になまめかし
むくつけくおそろし

右三時間。

作文

一、師道を論ず(普通文)

二、修學旅行の記(中古文體)

●祖先の孝德　こは少しふるめかしきことなれど參考のすゝ

妾(佐々有隣子)が曾祖父佐々喜藤太學次が祖父佐々半右衛門政次が妻の猿木秀子は舅姑に孝に夫に貞に數十年のひさしき年月を一日のごとくよく、その病を看護して事方よろしかりし旨を以て、熊本藩主細川侯より、左記の褒賞ありたり。

○申渡

佐々喜藤太養方之祖父

佐々半右衛門
妻ひで

右者夫病中介抱手厚死後追善懇に有之且舅姑へ事方宜く病中介抱手厚有之候趣委達尊聽奇特之儀被思召上候依之目錄之通被下置旨御出之以上

弘化二年十一月二十四日

目錄

一白銀五枚

(肥後　佐々有隣子投)

●何等の醜体だや　嗚呼、吾が同胞、しかも姉妹に、此の如きもののあるか、うたてきことの限りなり。かゝることを記すはこのましからねども、一は孃たちのいましめ、且はかゝる人のこらしめにもとてか〻ぐ、さて聞き得たるものは

府下小石川區小日向臺町二丁目邊の基督敎々會を預り居る宣敎師、米國人ブリットン氏方に同居せる女牧師田邊みか子と云ふは、風采氣高く、辨舌爽かに

て、信者は何れも同女を尊みて下にも置かぬ待遇なりしが、此頃に至り、同女が、水道町大日如來の緣日に男と携へて牛肉店に醉を買ひ居たるを見たりと云ひ出でたる者あり、信者等は怪しからぬ事なりとて、尚精しく之を探るに、其男と云ふは、矢張同教會の信者にて、神田區神保町邊に居る某法律學校の生徒井戶正忠といふ者にして、毎日みか子と小日向八幡の社内に密會したりといふ事分りしかど、人々大に憤り、之れ教會の威嚴を汚す者なりとて、牛込區仲町に住む女畫師三田とき子主唱者となり、たか子排斥の事をも言ひ出でたるに、信者中には、あやしくもみか子の味方もありて、小石川區竹島町の酒屋高島某の妻さよを頭として、排斥に反抗し、互に軋轢し居たるが、結局仲裁する人ありて、二派の領袖ブリットン氏の面前に於て、協議を爲す事となれり。左る程に、みか子崇拜派の人々は、密に集會して議するやう、協議の結果遣り損んじては取返しの付かぬ一大事なり、特に先方の首領三田とき子は、女に似合はぬ議論家なれば、用心せでは叶はじとて、密議の末、當日襖の陰に各自の夫を忍ばせ置き、萬一議論に負けたる時は、腕力を用ゐても胡魔化す事となしたるが、愈々當日となりたれば、双方ブリットン氏の宅に集まり、討論に時を移したるが、宣教師立會の上、婚儀を宣言せざる中は、決して密會を許さぬ規則なるに、みか子が宗則に背き、男子と野合せしは靈妙なる我教會を奸淫の媒介所と爲したるなりと、とき子の說に言破られ、みか子派は顏色を失ひたる時、豫て戶外に忍び居りし渡邊派の男子は、會釋もなく座敷に入り來り、とき子を圍みて議論を妨げ、亂暴の振舞をなすに、ブリットン氏は大

に驚き、双方の中に割て入り、此場は我に任せよと其夜は一先づ解散したるが、みか子排斥派は益々激昂し、到底淫亂牧師を放逐せざれど止ずと意氣込み居れりと。

この事果して信ならんか、吾人は大に懲戒を加へざるべからず、兎角耶蘇教信徒には、なまめきたる女子の多きは、吾人が常に耳にする所なるが、斯如に至りては、亦極まれりといふべきなり。蓋、耶蘇教徒にして、正しき道をわたるもの尠きは、多く我が國躰に適はざる所あれどなり。貴とき祖先を餘處にして、ゴッドを拜し、ゴッドの助を得るなどいふ迷夢に陷りて、未だ醒めざるものは、おのづからかゝることも出來なん。男子と密會し、牛肉店に醉を買ふなど、世のつねなみの女子のなすべき事なるか、又、みか子排斥派といへるも、そのふるまひ、女子にはにげなきことども多し。

かゝることを傳ふるは、吾人の最も快とせざる處なり、冀くば此報をして虚ならしめよ、空ならしめよ。

●更衣の節　日一日と暖さ迫り來て、いよゝ更衣の節とはなりぬ。さて、此の折に臨みて、世の嬢たちは、如何なる衣をか撰らんとする、輕快にして清爽ならんは勿論なれども、中には、時流を追ひて、華美の装を旨とし、今年は如何なる縞柄の流行るやなどに專ら心を止めんもあらんかし。殊に此の二三年以來は、年一年と、世は驕奢に流れて、益々高價なるものをのみ購むる傾あるは事實なり。あな、おぼつかな、嬢たちは能く此の潮流の中に卓立して、質素の風を守り得るや否や。顧みよ、嬢たち。嬢たちは、その服裝の爲めに如何ばかり嬢が父母の心を

いたましむる、深夜人靜まるの時、獨り自ら思ひみて、あるは、はふり落つる涙もあらんか。孃が常に身に纒ふ衣服は、孃が心に耻ぢざるの服裝なるか、孃が心は果して綾羅錦繡なれや吾曹亦何をか言はん。然れども、吾人が常に見る處聞く處によりて徵するに、その心綾羅錦繡なるもの、その裝、必、綾羅錦繡ならず。その裝綾羅錦繡なるもの、その心、亦、綾羅錦繡ならざるなり。蓋、その心麗はしきものは、その裝に意にとゞめずして、而してその德はますます輝き。その心の醜なるものは、これを掩はんとしてその裝を麗にし、而して益々その醜をあらはすものか。倘、錆ひたる刀は、黃金づくりの鞘に納むるともなにかせん、かへりて、利刀の白木鞘こそ、おくゆかしくも、貴とくも見ゆるなれ。あはれ、孃たち、時流を追ひて裝の美ならんことを心がけ給はんより、心がけ給ふものは、孃の心ならん。その心をだに麗はしくしたまはゞ、その服裝の如きは、亦とひ給ふにいたらざるべし。されども、女子は、亦、女子だけのたしなみなかるべからず。垢つきたるを着、ふしだらなる樣してよしとにはあらず、たゞ程を知り分を考へ、且、淸らかにして身に適したることそよからめ。冬は暖かに、夏はすが〱しければたりなん。價高くきら〱しきものとて、汗しみ垢つきたるはせんなし、價は廉にして、去かも淸らかに、能く身に應へることそかへりて銳刀の白木鞘にもたぐへて、人におくゆかしくも貴とくも見らるゝなれ、況んや衞生のみちにも適へるをや。

●おことわりと豫告と　女鑑、近頃、兎角發行定期日おくれがちの處、そは、かねても告げまゐらせし如く、印刷物のおはれたるにて、編者も、いと心

もとなく思ひゐたり。されど、前號よりは、是非定期にと、心を盡せし甲斐ありて、期日には、既に製本も、大方は出來上りゐたりしに、折惡しく、隣家の出火にて、いたく混雜し、爲に印刷したるものも、多く紛迭、又は不用に屬して、再び摺り直しなどし、計らずも日子を費して、折角のこゝろづくしも水の泡となりぬ。次ぎて、こたびも、いさゝか其の影響をうけて、定期をおくれたり。次號は如何にもして期日に發行すべし。讀者幸に諒してよ。

此度にて、總目錄かゝげ終る筈の處、記事湢湊して、載すること能はず、次號には、必ず登載すべし。さて、そのつぎよりは、安藤朴翁の著したる「ひたち帶」といふを附錄として連載すべし。此のひたち帶は、未だ刋本となりたるものもなく、世に珍らしきものなれど、國文學者の參考には、最も好個のものと思はる。猶、見ざる人のたよりにもとて、朴翁の傳をもつけ加ふることゝなしぬ。

又、漫錄欄の一分には、此迄、目新しく、世に多く得がたきものどもをさがし錄して、聊か國文を學ぶ人たちの、參考、且は、樂みともなりなんことをつとめたり。此の後も、ます〳〵此等の材料を輯錄することを計るべけれど、中には、余り難きに過ぎて、若き少女子たちには、見つゝ睡けをも催し、あたら倦退の心をひき起さん、今少し易きものをなどいはるゝ方々も少なからず。實にさもあることゝ思へれど、此よりは六ヶ敷もの、間々には、面白おかしきことども挾みて、少女子たちの心慰さめにもせん。其の他、女子に最も必要なる家政なども、益々材料を撰びて、專ら讀者諸君の好意に報いたてまつらんことを期すべし。



教の庭

六月五日兼題　曉時鳥

天

待ちわびてれもひたねたる曉に
うれしくもなくほとゝぎす哉　伊勢國飯南郡櫛田村　近藤ふく子

地

むかしへをしのぶ寢さめの曉に
涙そへても鳴くほとゝぎす　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

人

いかでかり霄の宿りやうかりけん
東雲まだでなくほとゝぎす　岡山縣備前國和氣郡伊里村　西　艶子

秀逸（十五首）

待ちわびてれもひ絶ねしを曉の
ねさめに名のる山ほとゝぎす　香川頴子

あかでいる月をゝしみて山のはに
あかつき深く啼くほとゝぎす　木川里子

一聲はこゝろもとなしほとゝぎす
なほ明けぬ間にをり返しなけ　吾妻近子

ねもやらて夜はあけにけり郭公
いまひと聲を待つとせしまに　玉井隆子

きぬきぬの別れの末かあかつきの
聲もつゆけきやまほとゝぎす　德永萬壽子

夢となくうつゝともなく聞きに鳬
曉かけてなくほとゝぎす　伊藤美代子

待ちわびてしはしまどろむ曉の
ゆめれとろかす山ほとゝぎす　名取正代子

ねさめすはきかざらましを時鳥
ありあけの月になのるひとこゑ　山根久子

ゆめならてきくもうれしや有明の　春永幾志子

月にひとこゑなくほとゝぎす

ほとゝぎすいま一こゑと思ふまに
月もしらみて夜はあけにけり　岸田はつ子

ほとゝぎすねざめしてきく一聲も
ゆめかとたどるあかつきの空　樋口晴子

ほの〲とあけゆく雲に嬉しくも
はつ聲もうすほとゝぎすかな　重松たか子

あり明の月はうすれてしらみゆく
雲にさやけくなくほとゝぎす　林久子

ねもやらでまちしかひあり有明の
月のいるさのやまほとゝぎす　廣田とめ子

ほとゝぎすよその初音に後れじと
有明のつきにいそきなくらん　日高かず子

（以下原稿到着順）

ほとゝぎす曉かけてなきつるは
月になごりやをしむなるらん　山口やす子

一聲のゆくへもしらすほとゝぎす
たゞあかつきの雲になくらん　中山登美子

あけがたの枕にひゞくひとこゑは
月にものいふやまほとゝぎす　冬木赤子

小松原しらみそめたるあかつきに
ひとこゑもらす山ほとゝぎす　住山幾子

鐘のねに驚かされておきいづれは
のこれる月にほとゝぎすなく　福原望子

ほとゝぎすさやかに名のる一聲に
やがてあけゆくしのゝめの空　田島龍子

ありあけの月落ちかゝる高ねより
ひと聲名のるほとゝぎすかな　太田貞子

まちわびしよひにはきかで郭公
たゞ一こゑに夜はあけにけり　秋田稻子

旅まくらさみだれ比のあかつきに
うつゝともなく聞く杜宇　楢田よし子

なく聲はいつも變らぬほとゝぎす
曉かけてきくもなつかし　長山孝子

有明の月を木の間にのこしおきて
一こゑもらすほとゝぎすかな　武政常盤子

曉のそらになくなるほとゝぎす
月をたどりていつち行くらん　松浦てる子

有明のつきかけくらくほとゝぎす
聲するかたも見はかさりけり　田中ゑん子

寐ざめずば聞かざらましを郭公　牧山きよ子
　鶏より先きのあかつきのこゑ

ほの〳〵と明けゆくそらに郭公　伊藤　清子
　名のる聲こそうれしかりけれ

あかつきのそらになくなる郭公　安井うめ子
　我がれこたりを諫めかほなる

ねざめしてきくぞ嬉しき明かたの　石川　樂子
　ろらに鳴くなる山ほとゝぎす

明かたの寢覺に聞きしほとゝぎす　石川　頼子
　こゝろもろらにれきいてに鳬

郭公名のりてすぐるこゑすなり　石川　久子
　聞くもうれしきあかつきの空

一ゑきりとりの八聲になきかはし　仁保　基子
　あかつきつくる山ほとゝぎす

あかつきの鶏の八聲におくれじと　眞島千鶴子
　ひとこゑもらす山ほとゝぎす

明け近くなくほとゝぎす山の端に　綿野りき子
　かくるゝ月ををしむなるらん

あけのこる月に一こゑなきすてゝ　羽室　象子
　やがてすぎゆく山ほとゝぎす

足引のやまほとゝぎすさとなれて　大谷　友子
　をちかへりなくありあけの空

時鳥まちつるかひもありあけの　小町谷里江子
　つぎにさきだつあかつきの聲

有明はつれなきものをほとゝぎす　小町谷園子
　たゞひとこゑに月ぞのこれる

聞き洩す人もありなんほとゝぎす　諸井　貞子
　ねざめの空をすぐるひと聲

時鳥まつまほどなくあけそめて　美奈井芳子
　わかるゝ雲のうらになきけり

あかつきの枕のやまのほとゝぎす　山田　瓊子
　夢の名殘りをなきわたりゆく

鶏のねに宿は立ちしをはこね山　曾山　道子
　なきてすぎゆくほとゝぎす哉

さしくしの曉やみにはこねぢを　楠　精子
　わが越ぢゆけばほとゝぎす啼

外山には有明のつきのほのみゑて　野田千代子
　旅ぢのそらになくほとゝぎす

横雲のわかれもみえてはこねぢに　溝口　直子
　われをなぐさむ山ほとゝぎす

よそにめて立つやたひちの時鳥
友に逢ひぬること ちこそすれ　根岸　英子

ねやの戸をあくれは未だ影くらく
軒はにちかくなくほとゝきす　神田　樂子

あかつきの夢はあやなく明けそめて
うつゝにきゝし山ほとゝきす　小川　金子

明方やほとなかるらんほとゝきす
まくらの山になきてすきゆく　小川　富子

郭公ひとこゑなきて過きぬなり
茅がのきはにしらむつきよを　中島　房子

ありあけの月の傾ふくやまのはに
ひとこゑ高くなくほとゝぎす　澤田　俊子

しのゝめのあけゆく方に幾そたひ
をちかへりなく山ほとゝきす　大森　純子

朝ぼらけうちの渡りを越ゆくれは
耳もとちかくなくほとゝきす　細井　糸子

山のはにのこれる月やをしむらん
なき明してもゆくほとゝきす　成田　延子

待ち侘てなかぬ朝けのほとゝきす
夢かとむかりれどろかれぬる　溝口　寬子

ほとゝぎすなくひと聲に夢さめて
かけしらみゆく月を見しかな　島田　好子

さし櫛のあかつきつくる鳥のねに
きほひてなくか山ほとゝきす　木村　彔子

さし櫛のあかつきかたの雲の上に
何處ともなく鳴くほとゝきす　仁保志磨子

有明のつきかけ落つるにしやまに
ひとこゑ高くなくほとゝきす　富士村幾子

有明のつきをのこしてほとゝきす
くもゐはるかになき渡るなり　中山かず子

ほのぐらきあかつきになく郭公
聲むかりしていつち行くらん　織田きみ子

有明のつきのほつかにこゑはして
姿は見ゆすなくほとゝきす　土肥　仙子

小夜更てみ山出てけんほとゝきす
あかつきかけてきくそ嬉しき　東野けい子

有明のつきにねを鳴くほとゝきす
そらよりかをる聲のいろかな　西元とも子

さらみ行く雲井遙に名のりつゝ
天の戸わたるほとゝぎすかな　西元　花子

入る月を惜みてや鳴くほとゝぎす　　西元とよ子
　　ひとこゑなのる志のゝめの空

夜を籠て山をいでしかほとゝきす　　諸井久良子
　　あけゆく空にこゑのきこゆる

あかつきの小暗き空にほとゝぎす　　舘脇ます子
　　人のねふりをさますひとこゑ

天の戸もあけぬと空にほとゝぎす　　柳田　里子
　　ふた聲三こゑ鳴きわたるかな

ほの〳〵と志らめる空にほとゝぎす　　戸塚てつ子
　　聲さやかにも鳴きわたるかな

一こゑを空になのりてあかつきの　　黒瀬春惠子
　　ゆめおどろかすほとゝきす哉

時鳥おのかあさいのおこたりを　　帛山百合子
　　空にいさむるあかつきのこゑ

時鳥あかつきかたのひとこゑに　　帛山千代子
　　見はてぬ夢のゆくへをそ思ふ

入こゑなくかげの湊のしのゝめに　　帛山ゆき子
　　さそはれけりな山ほとゝきす

郭公あかつきかたに聞きしかな　　帛山せい子
　　夏はよひよりふすへかりけり

初ねをはきかまほしさに待つ宵の　　尾立　富子
　　あかつきかけてなく時鳥

ゆめさめて枕にうらむあかつきに　　竹村竹里子
　　山ほとゝきすなのりゆくなり

待てぞこそ仄にもきけあさはらけ　　吉田登代子
　　雲井はるかになくほとゝぎす

有明のつきなほのこるしのゝめに　　錦織さち子
　　なくこゑ高きはつほとゝぎす

しらみゆくくも間を出でて時鳥　　羽田三緒子
　　なくねさやけきあかつきの聲

ほとゝぎすとりよりさきに聲高く　　河田いし子
　　なきてすきゆくあかつきの空

さし楠のあかつき雲のはたてより　　佐々小琴子
　　をちかへり啼くほとゝぎす哉

ほとゝぎす待たぬものから曉の　　佐々有隣子
　　夢をゆすりてもらすひとこゑ

五月雨のをやみなくふるあけ方に　　鈴木まさ子
　　啼きてすぎゆく山ほとゝぎす

あけわたる雲まの月にはつこゑを　　鈴木ひさ子
　　鳴きてすぎゆくほとゝぎす哉

しのゝめのゆめか現かほとゝきす　たしかにもらせあとのひと聲　星野かず子

東雲のまだほのぐらき明けがたに　あわたゞしくもなく時鳥　星野ひと子

都へもひとこゑもらせこのさとの　あかつき毎になくほとゝきす　星野康世子

あかつきの夢呼び醒すほとゝきす　一こゑたかくなのりてそゆく　川中たづ子

時鳥いまやなのるとまち〳〵て　聲きくときそ夜はあけにける　坂田きみ子

ほとゝぎすれはつかなくも思ふ哉　あかつきちかくなけるひと聲　佐藤起代子

一聲にゆめはさめけりありあけの　月かけたかく鳴くほとゝきす　池田　幾子

ひと聲を耳にのこしてほとゝぎす　たび路さひしきあかつきの空　穴澤　松子

あけがたのゆめか現のなかそらに　聲ふりたてゝなくほとゝぎす　海島　信子

時鳥ねさめわひしきあかつきを　なくさめかほになき渡るなり　丸田ゑい子

あかつきのつきのみさゑて時鳥　ゆくへもしらぬこゑもする哉　得田なか子

ほとゝぎすなきつる聲に目醒れど　たゞありあけの月のみにして　喜道きく子

ほとゝぎす待たて聞きゑし曉の　寐さめそいとゞ嬉しかりける　江口とみの子

しのひねもさたかにそきく時鳥　ねさめうれしきあかつきの空　吉村ふて子

まつ宵は音つれもせてほとゝぎす　思ひもかけぬあかつきのこゑ　天岡　龍子

あかつきに姿をみせてひとこゑを　つきにれはすか山ほとゝぎす　杉浦　芳子

ほとゝきすなきつる方を眺むれど　今もむかしのありあけのつき　大庭　靖子

宵のまの月をさまりてほとゝぎす　あかつきやみを鳴き渡るなり　大久保みち子

ほとゝぎすまちし恨もなつころも　あかつきちかくもらすひと聲　大溪　繁子

ほとゝぎすまちにしかひも有明の　月よりたかくなのりけるかな　下村さた子

あかつきの月影くらきおほそらに　中桐きやう子
　うれしく名のるほとゝぎす哉

有明の月ののこれるにしやまの　植木とよ子
　雲間になのるほとゝぎすかな

あかつきのそらになくなる時鳥　植木はな子
　聲きくごとにあはれなりけり

軒ちかくひと聲なのるほとゝぎす　石川すけ子
　明け方かけていつち行くらん

天の戸もまた明けなくに何處より　萩原章子
　ひとこゑもらす山ほとゝぎす

ありあけの月にひと聲なきすてゝ　三谷起美子
　いづちいにけん山ほとゝぎす

眺めやる折しもあれやほとゝぎす　矢野うめ子
　なきてすぎゆくあけぼのゝ空

まちわびついつしかふけて月影の　高橋かね子
　落つるみ空になくほとゝぎす

卯の花の垣根あけゆくあけぼのに　失名
　ひと聲なきて行くほとゝぎす

あけちかみ燈火きえてねさめたる　小森さた子
　まくらの山になくほとゝぎす

あかつきの峯にかゝるよこ雲に　北村孝子
　聲もかくれて鳴くほとゝぎす

あかつきの鳥より先にほとゝぎす　北村左枝子
　雲まに名のるこゑぞきこゆる

天のとのあけゆく空にさやかにも　北村貞子
　なくかまくらの山ほとゝぎす

心ありて來てや鳴くらんほとゝぎす　山本ちゑ子
　あかつきかけてまなぶ小窓に

入る月のなごりを惜みあかつきの　山本すゑ子
　なく／＼歸るあけかたのそら

まち佗ひてねぶり絶ねにし曉の　住吉すみ子
　まくらの山になくほとゝぎす

この頃は里なれにけんほとゝぎす　住吉貞子
　あかつきながら聲のきこゆる

ほとゝぎすあかぬ初音を洩すなり　中村榮子
　むらくもさよふあかつきの空

しらみゆく有明かたのほとゝぎす　松岡濱子
　月のなごりををしむにやある

あり明の月のひかりにほとゝぎす　福本とら子
　一こゑなのるあけかたのそら

しのびねに一聲なのるほとゝぎす　壺井美幾子
　わかつきがたにきくぞ嬉しき

よひ〳〵にまちわびにける曉の　磯野たま子
　初音うれしきほとゝぎすかな

有あけの月もほのかにかけ見えて　磯野いと子
　ひとこゑなのる山ほとゝぎす

有あけの月まちいてゝほとゝぎす　磯野こと子
　人つてならできくぞうれしき

ほとゝきす有明のつきをなかむれは　林常子
　雲井はるかにもらすひとこゑ

有明のかたふくつきをとめかほに　上原のふ子
　山よりいてゝ啼くほとゝぎす

まつよひはつれなかりしも有明の　下元もと子
　月にうれしくきくほとゝきす

ほとゝぎすあかつきやみの一聲は　内田清子
　もの思ふ身ぞわきてかなしき

あかつきのしらめる月に影見えて　内田菊子
　空にひとこゑなくほとゝぎす

ほとゝぎすいま一聲とまちもふまに　田代艶子
　はやしらみ行くしのゝめの空

みしかよの曉かけてほとゝぎす　田代綾子
　まくらの山を過ぎかてになく

くるゝよりまちつゝをれは有明の　竹村貞子
　月になのりてゆくほとゝぎす

短夜もねられざりけりたえまなく　三島みさ子
　あかつきかけてほとゝぎす啼

東雲のしらむくもまをほとゝぎす　下田ひろ子
　二こゑ三こゑなきてゆくなり

ほとゝぎすなく一聲にめさむれは　佐々木常子
　つきれちかゝるあかつきの空

あかつきのそらさためなく時鳥　山口みち子
　いつこの里へ啼きてゆくらむ

ほとゝきすなかぞは夢にきゝつゝも　山家つゆ子
　さめてうれしきけさの初こゑ

月はまだは山にかゝるあかつきに　大久保みち子
　あはれも深く鳴くほとゝぎす

有あけのつきかたふきてほの暗き　榊原八千代子
　雲まにもらすほとゝぎすかな

をりしもあれやま時鳥名のるなり　村治みき子
　まだれしあくるしのゝめの空

一聲はうつゝともなしあかつきの　金森とし子
　空なきわたるやまほとゝぎす

一こゑは月にもらしてほとゝぎす　國廣きさ子
　あとうらめしきあけがたの空

有あけの月もかすかにのこりけり　清島治子
　あかつき近く啼くほとゝぎす

やま鳥またれきゝ出てぬあかつきに　横田須磨子
　ふた聲三こゑなくほとゝぎす

まちわびて寢なんとおもふ曉に　春野しづゑ子
　一こゑなのるほとゝぎすかな

六月五日兼題　雨中待友

天　筑前嘉穂郡飯塚町　林久子

かどの山田もうゑはてけん、おもしろううたひたりし田歌のこゑもたえて、きのふけふは、かきくらし晴れんともせぬ五月雨のそら、さらぬたにいふせきくさのいほりの、さう〳〵しさいはんかたなし。かゝるをりには、ちぎり置かぬ人さへまたるゝを、今年はかならず、ほとゝぎすに遅れしといひおこせたりし友は、いかにしつらんなど、いひくらして、ひとりつれ〴〵をなぐさめかぬるをりから、ほとゝぎすの一こゑおとなひたるは、かの友に聞せまほしうて、こよなう口惜くぞ。

地　麹町區元園町一丁目六番地　白井とな子

心をすましきを靜かにして聞くに、妙なる音の我耳にふれぬ、琴にあらず瑟にもあらず、忽ち激するかと云へど忽ち靜かにして、訴ふるか如くかこつか如し、あゝ此あやしき音はなにならん。窓を開き見れど、今朝より小やみなくふりしきる雨に、空は薄墨のごとく一面に雲みちて、いつやむべきけはひも見えず、道行く人もまれにして、四方なにとなう物さびしく、草木は雨を得て緑いよ〳〵深く、軒のしづくのみ所得がほに妙なる樂をぞ奏でける。家の内も小くらくて、物こゝろほそくさびしきに、かゝる折山里などに獨すむ人の心やいかならんなど思ひやらるゝにも、今日こんといひし友の君にはいかゝし給ひけん、今は我家にむかひ給ふ頃ならんを、さぞや此雨にてなやみ給ふらん、實につれ〴〵

なる折に、へだてなき友とかたらふこそたのしきわざなれといひし、昔の人の言の葉も思ひ出でられて、かなたの空をながめつゝ待つほどに、まてども／＼音なふものはなく、時々戸を打つ雨に驚かさるゝばかりにて、はや夕くれにもなりぬ。あゝ我方のかくまで待つ友の君にはいかゞし給ひけん、にはかのいたつきなどにもかゝりやし給ひけんなど、思ふにつけて、實に心もとなく、かなしさのみいやまさりて、

軒つたふしづくの音もさびしきに
　友まつ頃の夕ぐれの空

など口すさびて、せめて心をまぎらはさんとしらぶることの音につれて、軒端のしづくも、いと物あはれにしたゝりきぬ。

人　甲府市山田町　名取正代子

かきくらし日をふる雨の、いつはれぬべしとも見えず、あはれ、きのふもけふも、日すがら夜すがら、をやみもやらでふりしきるに、ほと／＼こうじはてぬ。かゝるつれ／＼なる折柄、いかで訪ふ人もがなと、ひたすらにまちわびぬれど、間なくふりしきる雨の爲に、門邊の小川もみかさまさりて、道も絶えはてぬれど、ふみわけてとふ人だになく、したしき中さへ、とひふるしぬるをいかゞはせん、とかくさう／＼しきまゝに、「かくばかりさびしからめや雨の夜もかたらひあかす友のありせば」などゝ、獨りごちつゝ、さりとも、此つれ／＼に同じ心の人もあらむ訪ひも來なんと、晝はひねもす、夜はよもすがら、まてどもまてども音なふものなくて、たゞ／＼聞ゆるものは、軒の玉水、木草のしづくなどのたちたぎつ音のみなりけり。あなさびしの雨の夕や。

かきくらし雨のふるやはとふ人を
　松の雫の音ばかりして

人　福岡縣福岡市天神町　江口とみの子

花見し春もいつしか過ぎて、長雨しめやかに降りつゝくこのごろ、庵の中に籠りゐて淋しさ言はんかたなく、文書きなどするも、いとものうくつれ／＼なるに、心へだてぬ友の、今日問ひこんと、きのふ言ひおこせしものをなど思ふにも、いとこひし、近きわたりならむ、むかへ車やらましものをなど、うちくんじて、ふる琴とり出でかきならす折しも、人の

けはひするやうなれは、いと嬉しく、たち出で丶見れど、軒の柳の、いよすはらふ音なりしも、いとはらだゝし。

（以下原稿到着順）

福原菫子

さらぬだにさびしさまさる山里の、此頃はまた一入にて、そほふる雨のたゆまなく、あたりしめりがちにて、いふせきこと中々にたとふるに物なく、ひねもすゐまにとぢこもりて只ものかなしき蛙のころひ聲きくのみ、いとさうゞしし。かゝる折に、日頃親しき友君のきませど、いかにうれしからん、へだてなく物かたり、はたこのめる文など讀まんにも、おのづからたのしくて、かゝる日こそ却てよなきさちならんにと、思へど檐端にしたゝる雨の音窓に音つるゝ松風にも、其君かと驚かるゝもをかしうてなん。

黒瀬春惠子

日ごとに打ちつゞきをやみなくふる雨は、いつ晴るべしともればゐぬを、今日はことにいみじ、此長雨に心もいとゞしめりがちにて、終日何のなぐさむかたもなくて、すごしぬるぞわびしきや。さるにても心へだてぬ友垣、げに戀しうてなむ。あはれ〱、此をりをすごさてれとなふ友もがなと、空たのめに待ちわぶるもかひなし。かゝる折しも、ほと〱しどの戸をたゝく人のけはひは、さてもいかなる人のおとづれならん。

綿野りき子

をやみなく降り暮しつる五月雨に、唯さへいふせき伏屋の一入しめりを加ふるにぞ、如何て心の晴れ行くよしもがなと、をぐらきまどに寄りそひて、朽ちはてし軒より落つる玉水を眺めつゝ、かゝる折にこそ魂あへる君の音信れなど、月見るくまなき徒然の言の葉を、互に打ちかたらひて、いかに、樂しからましかど、思ひめぐらすに、いとゞへだてなき友の、懐しさ戀しさまさりきて、たま〱里わに聞ゆる水鷄の聲も、いとわびしうてなん。

白井とま子

つら〱世上を見るに、萬物皆友あらざるものはあらず、かの花の頃に來る燕、花を見捨て歸る厂も、歸來皆友と共にせざるはあらじ、あるは美しく咲く

花も、茫々たる荒野に獨り裝ふものにはあらで、必ず等しき草木のしげれる地には生ずるなり。げにものゝ友を欲するは、皆自然によることになん。されど、人の友を慕ふはもとよりことわりあることにこそ、月の夕花のあした、心あふ友と共にながめんには、いかにたのしからん。頃しも六月なれど、降る雨しげきに、軒端も朽ちんばかりなりけり。されど、すぎにし春の如く、外に出ることもかなはず、終日籠り居て、書などけみするも倦み、いかでかたらふべき友もがなと思ふも、とひ來ん人もなし。時に人のけはひするに、思ふ人かと出つれど、物商ふ人など、あはれかゝる物淋しき日に、心あふ友とうちしめりたる物語などしたらんには、いかに樂しかるべき、げに人の友を欲するは、むかしも今もかはらぬにや、されど古、世を逃れて山澤に匿びし人も、峯にたなびく白雲、あるは清けく谷間を流るゝ水、あるは咲にほふ花、樹間に歌ふ鳥などを、己が友として自然をたのしみしとなん、など種々考ふる折から、聲高く訪ふものに驚けど、これなん小やみなくふる雨の、倘一しきり降りまさる音にてありき、さるにても待たるゝものは友なるかな。

東野けい子

春の雨はいとしめやかに、わらびつく／＼しなどの生ひ出でなんと思へど、野山のけしきのなつかしく、いとたのしく、晴れ間の待れしを、五月雨は卯の花くたすといひけん樣に、晴るゝひまなく日數ふる中、いたくふる日は、朝より夕ぐれの心地せられ、いと徒然なるに、かくたれこめてのみ過すもかひなき事なれば、今日は同じ流れを汲める心あひの友だちと、木のめいる業など試みんといひやり置きしも、此雨に路次の便りあしきにてうしてや、まだとひこねば、いく度となく彼方の空を眺むれどかひなし、文みるも心地ろの事にまぎれて、只軒の玉水の音のみきゝゐるも、いとわびし。

井澤たを子

なつかしきたらちねの親のみもとをはなれ、遠き都にまゐ來て、學びの業をいそしむにつけては、清き心の友どちばかり樂しきはまたあらじ。まいて故郷にあるときのやうにあらで、まことの親しき友かきのかずあらぬをや。折りしもさつきのなかば、物學び

の業も絶へ、あすはいとまと云ふ日、ひるかたより、空かきくもり、風さへいみじうふき立ちて、驟雨もや。降り出てなむなど思ふに、程へてくもるみ空のあなたに、少しの晴れ間見えぬ、あなうれし、かゝれどいかであすは雨やは降らむと、いとたのもし。そもあくる日は、わかはらからのやうにいとむつひあへる友の、音づれ來ますべき日なれど、いとゞうれしうのみ思ひやられて、はやくもあすの來よかしと、待ちわひなからうちふしぬ、曉方目醒めぬるほど、やり戶推し明けて眺むるに、れもひきや朝まだきより、雨こちたく降りしきるに、いとゞむねつふるゝばかりなりけり、あはれ吾が友はとさけび出すを、さはれ、君が心は、今いかゞあらんなど思ふに、いとあはれなり、朝げもをへて、しばしあるほどに、ゆゝしき雨は止みぬ、あはれ樂しきかな、今にも來ますらんと、よろこびてあるに、またしもふりきぬ、などてかばかりにも降りしきるならむ、まだ入梅には程あれど、さてそは降るまじきをなど、うちかこてども、たやすく止むべくも見えねど、一しほに胸ふさがる心地せり、いかに雨なくては、民草の、はへなしとは云へ、かゝる折りにはふらずもかな、さるにても、友なる人は、來ますらんか、來まさゞらんか、うるはふ障子のしたゞれて、やるゝばかりにこそ、あくれど閉ぢ、閉づれどあけするなど、いとゞわびしきや、かゝるほどに、雨をつきて入り來ましぬ、あなうれし、いかにいみじかりし道ならんを、よくこそ來ましぬれ、などいひもて、手をとりて入る、なほうちかたらはむには、一しほならむと、いとゞわびつる胸も、さながら晴れてなむ。

佐々有鄰子

此ころの五月雨に、机のあたりのちりは、いやが上にうちつもり、かびさへ萌えいでて、まことに朝夕の怠りをこそあらはしつれ。あなふがひなきわが心かなと、なげきてもかひぞなき。かゝるほけほけしき姿を見すてたまはずば、時鳥一こゑならぬ鶯の貴き音を、松の下ふく風のごとく、すがすがしく立てたまひて、朱の折戶をたゝき玉はゞ、此上なく嬉しともよろこびし、待ちかね山の松のけふりをくゆらして、一言きこえまゐらするになん。

鈴木まさ子

さみたれの候なれど、日頃たれこめて、いとさう〴〵しきに小田の蛙のなくねも、かしましく、夕つ方なきわたる郭公も、其の鬱をつくるもの丶如くにて、文机に向ひても、心の駒のはか〴〵しからねば、とするともなく、たゞ空のけはひのみながめ、暮すともなく、日をおくりぬ、けふしも卯の花くだしにふりこめて、やむべうも見えず、されど心しぶりて、文よむもうたてく、いとつれ〴〵なり。か丶るをりには、親しき友垣のとひ來なば、いかに樂しからん、いかにをかしき、四方山のはなしもあらんと、思ひて、待てど、絶えて音づるものもなく、この日も、はかなく暮しぬるかと、いともわびしきなく、思はれてなむ。

佐藤喜代子

實に人のいへる如く、此頃はさみだれいとつれ〴〵に、ふりつゞき、あたりいみしう、さひしくなりぬ、あなくやし、身は天さかるひなに、生ひ立ちし、賤の女なれば、ひねもす、しめりがちなる、まどのうちに、こもり居の友としたのしめる、庭の木になくうぐひすさへも、遠くさり、今はかたりあふ友もなく、ひとりさびしう、物しつゝありし折から、かどへにおとなふ者あり、何事かとかへり見れば、こは如何に、日頃ゆかしうなつかしうせし、我友、東に居ます、光子の君より、此頃の日曜日は、學びの業のいとまあるべければ、御許へ參らんと、いとねもころなるふみに、心をこめて、いと〳〵賑敷く、夫よりは、うきもさびしさも、打わすれ、日曜日のみ、指折り數へ、はやく其日のこよかしと、まちわたるも、いと〳〵ゆかしくたのしきかぎりに、なん。

園田うめ子

麗かなる日影は失せけん、去る頃より、曇り勝ちになりて、庭の花もおのづとよわりやしけん、蝶の音づれいとうすうなりぬ、

昨日の夕より降り續きたる雨、いといみじく止まんいろもなく、何となう心すげなくなりぬ、本は讀めども倦み易く、ひたすらに手を拱ぬくのみ、余りにつれ〴〵なるまゝに、とさまかうさまに試むれども其甲斐なくて、今日は早や快からずすべもなくなりぬ、きのふちかひし友も、雨にや閉ざされけん、音づるるやうも見えず、ものがたき彼の君は、いみじ

き雨なれどとて、さはあるまじきに、如何しつらん、君の訪ひなど、四方山の話もありて、さぞ面白かるべきに、あゝ、妾は君を待ち侍べる、など、獨り言云ひつゝ、おもての方の足の音ゆかしく思はれてなん。

得田なか子

さらでだに訪ふ人まれの我宿は今日此頃降りつゞく、さみだれの音ならでは、きこゆるものもなし、木梢のはがくれに、二つ三つつどさをさむるからすも、いとゞあはれげなり、ひねもす草紙などひもとけども、わびしさはやるかたなく、嗚呼かゝる折にも、清子の君の來まさむ、慰むるすべもありなんものをと、ひたすらにまたれて、そよとふく風の音にも、心おどろかれてなん。

伊東美代子

ころは彌生のなかばにて、のどかなる春の日の霞む花のもとに、親しき友どち打集ひて、青柳のいと長き日を共に語り暮さんと、かねてちぎり置きし事なれど、つとめて起き出て、妻戸おしやりながむれど、心なき春雨の、音もしづかに降しきるにぞ、あなつれなき雨にこそと、暫し外の方をうちまもりゐたる、さはあれど池の水を拂ふ樣の、いまだまゆにこもれど、色そへたるさま一際ながめをましぬ、雨の晴れ間に、花の雫を袂にしめて、おどろかしたてまつらんと、さるやんごとなき人のものせしふみをとり出てつゝ、わがとも〳〵かくやと待ちわびぬ、かく思ふは、我身のみならで、鶯もさこそ恨むらんに、春の雨ばかり心なきものはあらじなど、うちかこちつゝ見渡せど、雨は晴れんともせず、いよ〳〵音のみしげくて、くるかと思ふ人の影さへ見えねど、目もあやにいとゞかき曇る空と共に、はれぬ思に待わびられて、友來らず三春を過ぐてふから歌をずしつゝ、その日を暮しぬ。

三谷起美子

今日も又かきくらし降る五月雨に、窓の戸をだにあけず、とぢこめてあれど、いとゞさびしさやる方なく、せめておのがたのみの思ふ友とあひ見て、かたみに物がたりなどせむ、おのづから思ひも晴れなんをと、硯とり出でゝ、文かき、使ひにもいとよういひふくめて、よびにやれど、おはしまさゞりけりとて、歸り來るころ、いとかひなけれ。さてはせん

すべもなく、机に向ひ、なにともひもときても、來し方ゆく末の事ども思ひいでられて、文の言の葉には目もとまらず、只友しあらたそれもはゆるのみ、いとゞかひなき心のやみにこそ。

鈴木綠子

五月雨しめやかにふりしきて、晝なほ小暗く、はや夕暮のやうに覺え、あはれにものさびし、あまりつれ〲なれば、窓の下なる文机によりて、本どもひもとけど、軒端のしづくまら〲と窓を叩きてさう〲しく、胸の浮雲うやむやに、つら〲思ひめぐらせば、けふの休みを幸に、訪はんと契りし我友は、いかにしつらん、はやいたく時も過ぎぬるに、まだ訪ひもこぬ憂たてさよ、さらばこなたより訪はんかど、ためらひつゝも、今か〲と待ちわぶれど、訪ひくる景色更になし、されど、必と堅く契ぎりしものを、などてかくはれそきぞ、げに待つ身程憂きことはあらじかし、庭に榮ゆるときはの松と頼む甲斐もなく、契りし友は今いづこ、仇し雨にやながされけん。

松岡濱子

かきくらしふる五月雨の、やかて久しうなるに、見んとれもひし書も、大かたはつきぬ、つれ〲のあまり、月頃すてれきたるつま琴とり出してかきならす、こもうちつゞくなが雨に、糸の音しめりてかひもなし、梅の實ならねどほと〲うみはてぬ、いかでかゝらん折、心ある友もがなといのりつゝ、小くらき窓の障子引きあけて見出せば、うたてやのきの糸水千代もつきぬべう見ゆ。

岸田はつ子

めかれせず眺めくらしゝ花の梢は、みどりに茂りあひて、かげなつかしき中に、垣根の花のみ、ときならぬ白雪かとうたがはるるばかり、咲き匂ふもをかし。袂すずしき夕風は、雲のあゆみをはやめ、はら〲とうちこばしつつすぎ行くよとみしほどに、やがて、軒の玉水音なひそめて、遠山寺の鐘のひびきも、うらしめりて、あはれをそふるくさはひなるに、日くれぬれは、思もかけず、時鳥の一こゑ高くなきすてて、また遠方に、二聲三聲はのかにきこゆるなど、いふはかりなき雨夜のけしきなりけり、人もはたれなし心に打なからむらん火には、たつねきたら

でやはと、すびつに炭さしそへなどしつゝ、待ちわたれど、影だにも見えず、ただ釜の音のみすみわたりて。

樋口晴子

さらでだに問ふ人なくて淋しき此里に、きのふけふ、五月雨さへもふりくらして、つれ〴〵やるかたなう覺ゆるものから、いつぞや友のおこせしふみに、今としは花の頃もとはで打過ぎぬれど、數々かたらはまほしき事もつもりて、いとゞなつかしう覺ゆるに、近きほどにいとまもとめてなどありしを、ちからに、此二日三日は、もの〻ふみなどに心をやりしに、けふぞかりやと思ふにも、あしたの程よりよむふみも、なすわざも、心にしまぬ心地して、まちわぶれど、まだれともなし、あまり雨の烈しき故にや、されど友だち親しうちかたらはんには、か〻る日こそなか〳〵しめやかによかんなれ、さぞかりの事思ひ知らぬにもあらぬを、いかなるさはりにやなど、思ひあまりて、心をまどはす折しも、門のあたり車のきしる音のきこゆれど、いろぎ立ち出て〻見るに、車は何處をとふならん、知らず顏に過ぎ行くが、いと口惜しうもまたはらだ〻しうてなん。

廣田とめ子

家から少なき我宿は、常にもの淋しかちなりけり、まして降りつ〻きたる雨に、庭の小草處せきまで、生ひしけりて、いふせくなん、か〻るつれ〴〵なる日には、とひこん人もかなと、まちし折しも、人のもとより送り越たる花あやめ、色もゆかしければ、小瓶にさし入れたり、今日なんへだてなき友の訪ひ來なは、諸共に此の花を見はやして、歌などよみてそへてん、さあらんには花もわれも嬉からんと思へは、いよ〻やるせなく友を戀しう思ひつ〻、只打眺めをれは、軒よりおつる玉水の音さへ、あやしう聞ゆるも、折からにや。

村治みき子

降り續く五月雨に、今日も朝よりたれこめつ〻、うみはてたる梅の實の、折々庭潦に落つる音のみ聞くことの、いと侘しく、さう〴〵しければ、あはれ斯る時、心合へる友の二人三人も訪ひ來かし、さはれ打招かんもなめげなれぞと、思ひ煩ひつ〻、何心なく忘れしわけれど、築山の岩根に、目なれぬ瀧の走り

落つる遣水のそこともわかず溢れ出でゝ、こゞみ漂ふなど海山の景色取り集めたる心地して、面白しと見れど、いよ／＼面白くなるにつけ、今まで徒らにはれまをのみ待ちわびことの、いと愚に覺えて、

今ぞ知る物うしと思ふ五月雨も
　はれぬ心に見れどなりけり

など口ずさみつゝ、いかで友なる人に、この歌をも示し、かの景色をも見せばやと思はるゝに、さきの憚りをもとみに打忘れて、文したゝめ、よびに遣るとて、

降ると晴ると雲の心に任せ置きて
　我は親しき友をこそ待て

春野しづゑ子

さみだれやあるよひそかに窓の月。と、昔人のうたならん、げに、この頃のつれ／＼には、折ふしおとづるゝ、月さへいとうれしきをまいて、こよひは、親しき友のとはるべき、ちぎりありければ、くるゝまわびしく、いつか／＼と小やみの軒に、立ちてしたゝるゝ玉水をゆくりなくながめつゝ、ゆきゝの人もかさの内、見ぬまはゆかしけり、車の中もさしのぞかれて、しばし立ゐしが、なほ見えぬに、今はまちわびて家にいりぬ。かど吹く風の音にもそれかと、心おどろかれて、いと心ゆかぬ夕なりき。

女鑑歌文兼題　自六月至十二月

六月	廿日歌……夏懷舊	文……朝顔
七月	五日歌……山内一豐妻	文……作文の添削を乞ふ
	廿日歌……遠村白雨	文……盆踊
八月	五日歌……綠陰散歩	文……海邊に遊ぶ
	廿日歌……電信	文……團扇
九月	五日歌……野邊萩	文……室の蘭を見て
	廿日歌……松間月	文……辭書の撰擇を乞ふ
十月	五日歌……籬菊	文……祖先の祭日に
	廿日歌……海邊紅葉	文……友を招く文　茸狩の記
十一月	五日歌……深夜時雨	文……長／＼病み臥せる人に寄す
	廿日歌……落葉滿庭	文……新嘗祭
十二月	五日歌……遠山雪	文……友人の非行を誡むる文
	廿日歌……田家歳暮	文……爐邊閑話

女鑑第百三十三號目錄

（明治二十四年八月八日内務省許可）
（明治廿九年三月十四日遞信省認可）

社告

〇代價は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事〇郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事〇郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事〇別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事〇未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		
一冊	十錢	全國無遞送料
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢	

明治三十年六月四日印刷
同　年六月五日發行

編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衞

印刷人　東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木良雄

發行所（電話番號本局八八）　東京京橋區築地二丁目二十一番地　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）